

劇説

校注
附：譯注稿

(9)

○ 清 江都 焦循 撰
○ 中國城市戲曲研究會校譯

凡例

一、底本には『読曲叢刊』本（『叢書集成三編』所収）を用い、また『中国古典戲曲論著集成』排印本および北京図書館所蔵稿本（『続修四庫全書』所収）を参照した。

一、底本の巻頭には引用書目の一覧があり、本文で引用した典籍の書名と撰者が記されているが、本稿では掲載部分に見えるもののみを収録し、さらに巻数・提要・使用テキスト等について注釈を加えた。

一、本文の冒頭に施した数字は、条目の通し番号である。

一、中国語で原文・校注・人名注・書名作品名注・戯曲用語注を施した。

● 引用書に関する校注は、引用書該当部分の巻数あるいは篇名を、不分巻の場合はテキストの条目あるいは葉数を掲げ、また『劇説』の引用文との異同を記した。

● 戯曲用語注は、広く戯曲・演劇に関わる用語を取り上げた。

一、各条目末丸括弧内に担当者名を記した。

一、本訳注稿は、中国都市芸能研究会の有志（川浩・千田大介・氷上正・山下一夫）による読書会の成果である。いまだ不十分と思われる点も多いので、大方の批正を請う。

引用書目

程史^{宋岳珂}

十五卷。載兩宋朝野軼事。據中華書局《唐宋史料筆記叢刊》排印本。

西河詞話^{清毛奇齡}

二卷。清毛奇齡撰。載歷代詞曲逸事考證。據早稻田大學圖書館藏《西河合集》清嘉慶元（1796）年序陸凝瑞堂刊本。

知新錄^{清王業}

三十二卷。廣載考據雜說之類。據《四庫全書存目叢書》所收康熙五十六（1717）年刊本。

輟耕錄^{元陶宗儀}

三十卷。詳記元代典章制度、社會瑣聞。據中華書局《元明史料筆記叢刊》排印本。

詩辨坻

應作《詩辯坻》。清毛先舒撰，四卷。評論歷代詩詞曲。據上海古籍出版社《清詩話續編》所收排印本。

曲藻^{明王世貞}

一卷。係後人摘錄《藝苑卮言》中曲論而成書者。據《中國古典戲曲論著集成》所收排印本。

譚輅^{明張鳳翼}

三卷。載明季藝林軼事。據《續修四庫全書》所收萬曆間刻本。讀書堂文集

即《讀書堂綵衣全集》。清趙士麟撰。四十六卷。趙士麟之別集。

據《雲南叢書》本。

錦繡萬花公

宋無名氏輯。前集四十卷、後集四十卷、續集四十卷、別集四十卷。類書。據明嘉靖十五（1536）年錫山秦汴刊本。

續筆談^{明胡應麟}

即《少室山房筆叢續集》。收《丹鉛新錄》、《藝林學山》兩種。據上海古籍出版社《少室山房筆叢》排印本。

詞旨^{明梅鼎祚}

此書未見，待考。

秦淮劇品^{清潘之恆}

按：《秦淮劇品》之名，只見於《說郭續》卷四十四，僅收一條。而潘氏劇評均收於《鸞嘯小品》，焦氏所引《秦淮劇品》亦見於《鸞嘯小品》中。今據中國戲劇出版社《潘之恆曲話》排印本。

劇説

校注
附：譯注稿

卷四

江都 焦循 撰

186 相傳：有訟棍戴興邦者，年六十，止一子。適有

諸少年殺姦婦死而姦夫逸去。謀於戴，戴曰：「何不靜守村口，候孤身男子過，執而殺之，以姦報。」諸惡少大喜，挽入室，酬以酒肉。已而果有孤身者過，眾殺之，則正戴之子也。惺齋《杏花村》傳奇中訟棍單興邦，即戴興邦。單音丹，與戴正為轉音耳。按：元人曲中，如良吏必包拯，公人用董超、薛霸，惡人用柳隆卿、胡子轉，伎女用王蠟梅，兒女用賽娘、僧住，蓋必實有其人。《杏花村》用單興邦，尚其遺意也。

人名注

【戴興邦】生平未詳，待考。

【惺齋】即清夏綸。參見卷三140條。

【單興邦】清夏綸《杏花村》傳奇中人物。

【包拯】參見卷二098條「包希仁」注。

【董超】按：「董超」、「薛霸」之名，見於元李行道《灰欄記》雜劇中，為鄭州衙門差役。亦見於水滸故事、包拯故事戲曲小說中。

【薛霸】參見「董超」注。

【柳隆卿】南北曲中常見流氓姓名。參見卷一045條。

【胡子轉】又寫胡子傳。南北曲中常見流氓姓名。參見卷一045條。

【王蠟梅】即王臘梅。元雜劇中常見妓女姓名。見於元無名氏《爭報恩》、元李文蔚《燕青博魚》、元無名氏《神奴兒》、元無名氏《勘金環》等。

名氏《勘金環》等。

【賽娘】元雜劇中常見女兒之名。見於元關漢卿《魯齋郎》、元楊顯之《酷寒亭》、元李致遠《還牢末》等。

【僧住】元雜劇中常見男兒之名。見於元關漢卿《魯齋郎》、元楊顯之《酷寒亭》、元李致遠《還牢末》等。

書名・作品名注

【杏花村】參見卷三140條。

通釈

伝えるところでは、戴興邦という訴訟ゴロがおり、歳は六十で、息子が一人だけいた。ある時、数人の若者が不倫の人妻を殺したが、間男は逃げ去った。若者たちが戴興邦に相談すると、戴興邦は「村の入り口をじっと見張り、通りかかった独り身の男を引っ捕らえて殺せば、姦通の報いを受けさせる事ができるだろう」と言った。不良どもは大喜びをして、戴興邦を部屋に引き入れ、お札に酒や肉をご馳走した。ほどなく独り身の男がやってきたので、皆でその男を殺したところ、それは紛れもなく戴興邦の息子であった。夏綸の『杏花村』伝奇に登場する訴訟ゴロ単興邦とは、この戴興邦のことである。単は丹と同音であり、戴の転音である。思うに、元曲において、すぐれた役人といえば包拯であり、下役（の名）には董超や薛霸を用い、悪人（の名）には柳隆卿や胡子転

を用い、妓女（の名）には王蠟梅を、女兒（の名）には賽娘、男児（の名）には僧住を用いている。思うにいずれも實在の人物なのだろう。『杏花村』で単興邦（の名）を用いているのも、そうした名残であろう。

訳注

【転音】声母あるいは韻母のみが変化した字音。

（永上）

187 劇之有所原本，名手所不禁也。王實甫之本董解

元，尚矣。他如本《寶娥冤》而作《金鎖》，本《翠鸞女》而作《桃符》，本《曲江池》而作《繡襦》，本《合汗衫》而作《破羅衫》，本《張生煮海》、《柳毅傳書》而作《蜃中樓》，本《劉晨阮肇》而作《長生樂》。他如本元人而故變化出之者，則如《黃梁夢》之呂岩化為盧生，《麗春堂》之四丞相化為尉遲敬德。或有用其一節者，若《龐居士》之羅和，《長生殿》之唐明皇，雖不能青勝於藍，然亦各有所見。惟《夢釵緣》一劇，直襲《西廂》、《西樓》而合之，已為僞父可笑。又有《玉劍緣》者，亦有《彈詞》一齣。夫洪昉思襲元人《貨郎旦》之《九轉貨郎兒》，其末云：「名喚春郎身姓李」。洪云：「名喚龜年身姓李」。至《玉劍緣》又云：「名喚珠娘身姓李」，生吞活剝，可稱笑柄。近則有為《富貴神仙》者，竟至襲《玉劍緣》，與《夢釵緣》之襲

《西廂》、《西樓》同，若此，又何必為之。聊舉一二於此，為之戒。

校注

【亦有彈詞一齣】《玉劍緣》未見，待考。按：《長生殿》第三十八齣亦題《彈詞》。

【洪昉思襲元人貨郎旦之九轉貨郎兒】按：《九轉貨郎兒》見於《貨郎旦》第四折、《長生殿》第三十八齣。

【名喚春郎身姓李】見於《貨郎旦》第四折（九轉貨郎兒・九轉）。

【貨郎旦】「名」上有「小」字，「喚」下有「做」字。

【名喚龜年身姓李】見於《長生殿》第三十八齣（轉調貨郎兒・九轉）。

【為之戒】稿本上有「以」字。

人名注

【王實甫】參見卷一 034 條。

【董解元】參見卷一 028 條。

【呂岩】唐山西永樂人，一云陝西長安人，一云山東東平人。字洞賓，號純陽子。屢試不第，游長安酒肆，遇鍾離權得道。或云咸通三（862）年進士，任廬山縣令，遇鍾離權成仙。後擬為八仙之一。

【盧生】參見卷三 136 條。

【四丞相】元王實甫《麗春堂》雜劇中人物。即金元顏樂善。官右丞相。

【尉遲敬德】參見卷二 093 條。

【羅和】明劉君錫《來生債》雜劇、明無名氏《兩生天》傳奇中人物。為窮磨工，龐蘊贈銀救之，反而坐臥不寧，終還銀。

【明皇】即唐玄宗。

【洪昉思】即清洪昇。參見卷三135條。

【春郎】參見卷一045條。

【龜年】即唐李龜年。唐玄宗時梨園樂工。善奏羯鼓、箏篋，尤善歌唱。杜甫有《江南逢李龜年》詩。

【珠娘】即李珠娘。清李本宣《玉劍緣》傳奇中人物。道姑李雲娘之妹，與杜器成婚。

書名・作品名注

【寶娥冤】參見卷一045條。

【金鎖】即清袁于令《金鎖記》傳奇。參見卷三120條。

【翠鸞女】即元鄭庭玉《後庭花》。北雜劇。全名《包龍圖智勘後庭花》，亦名《包待制智勘後庭花》。有脈望館校《古名家雜劇》本、《元曲選》本。演宋包拯以《後庭花》詞為凭，斷翠鸞女案事。

【桃符】即明沈璟《桃符記》。南戲傳奇。有清康熙間抄本、清乾隆間抄本二十七齣本等，徐朔方校點《沈璟集》本則校對諸本定為三十齣。係元鄭庭玉《後庭花》雜劇改為南戲傳奇者。參見「翠鸞女」注。

【曲江池】參見卷二095條。

【繡襦】即明無名氏《繡襦記》傳奇。參見卷二095條。

【合汗衫】參見卷一045條。

【破羅衫】此當為《羅衫記》。《羅衫記》，一名《白羅衫》。明無名氏撰。南戲傳奇。有清內府抄本、中國藝術研究院所藏清抄

本，均三十一齣，鄭振鐸舊藏舊鈔本則二十八齣。此本或為《傳奇彙考標目》著錄明劉方《羅衫合》傳奇，待考。演涿州蘇雲與鄭夫人，赴任途中為賊所刼，蘇雲被禁，鄭夫人棄子逃生，其子成長後金榜高中，巡按蘭溪，接蘇雲與鄭夫人之狀，乃知自己出身，一家團聚事。事見明馮夢龍《警世通言》卷十一《蘇知縣羅衫再合》。

【張生煮海】元李好古撰。北雜劇。全名《沙門島張生煮海》。有《柳枝集》本、《元曲選》本。演潮州秀才張羽與東海龍女訂婚，而龍王不允，張羽煮海逼之成婚事。

【柳毅傳書】元尚仲賢撰。北雜劇。全名《洞庭湖柳毅傳書》。有《古雜劇》本、《柳枝集》本、《元曲選》本。演秀才柳毅為洞庭湖龍女三娘傳書於洞庭君，終成眷屬事。本事見唐李朝威《柳毅傳》。

【蜃中樓】清李漁撰。南戲傳奇。三十齣。有清康熙間刻本、清經術堂袖珍本、《笠翁十種曲》本、《笠翁傳奇十種》本等。此係《張生煮海》與《柳毅傳書》合為一事者。

【劉晨阮肇】即明王子一《誤入桃源》雜劇。參見卷一045條。

【長生樂】清袁于令撰。南戲傳奇。十七齣。有清乾隆四十（1775）年耕心草舍抄本、同治四（1865）年曹春山校訂本。清張勻亦有同名傳奇。十六齣。有舊抄本。或為此二本同出一源，待考。參見卷一045條「誤入桃源」注。

【黃梁夢】參見卷二082條。

【呂岩化為盧生】按：此當指明湯顯祖《邯鄲夢》傳奇。參見卷二082條。

【麗春堂】元王實甫撰。北雜劇。全名《四丞相歌舞麗春堂》，一

作《十大王歌舞麗春堂》。有脈望館校《古名家雜劇》本、

《醉江集》本、《元曲選》本。演金右丞相完顏樂善，御宴上打統軍使李圭被貶，後金主命完顏樂善還朝平寇，李圭負荊請罪，二人重修舊好。

【四丞相化為尉遲敬德】按：此當指明無名氏《金貂記》傳奇。南戲傳奇。四十二齣。有明萬曆間金陵富春堂刊本、清康熙間內府抄本、清烏絲蘭抄本等。演唐薛仁貴被困陽城，時尉遲敬德被貶，朝廷命之出征而裝瘋不接旨，程咬金識破真情，尉遲敬德攜薛仁貴之子薛丁山趕救，破敵奏凱事。元楊梓《敬德不伏老》雜劇亦演尉遲敬德被貶之事。參見卷一030條。

【龐居士】按：明清傳奇中演來生債故事者，有明王元壽《靈寶符》、明無名氏《兩生天》、清周景《竹漉籬》三種，其中《靈寶符》、《竹漉籬》無傳本，此當指《兩生天》。《兩生天》，一名《一文錢》。南戲傳奇。三十二齣。有清康熙間抄本。演西安盧至與襄陽龐蘊，陽間積德，皆歸正果事。明徐復祚《一文錢》雜劇、明劉君錫《來生債》雜劇亦演此事。

【長生殿】參見卷四150條。此當謂《長生殿》之據元白朴《梧桐雨》雜劇。

【夢釵緣】清黃圖琬撰。南戲傳奇。三十一齣。有首都圖書館藏清康熙五十七（1718）年排悶齋原刻本。此書未見，待考。

【西廂】即元王實甫《西廂記》雜劇。參見卷一051條。

【西樓】即清袁于令《西樓記》傳奇。參見卷三119條。

【玉劍緣】清李本宣撰。南戲傳奇。三十六齣。有中國國家圖書館藏清刻本。演淮南杜器與李珠娘，以玉劍為聘，而李珠娘選美上京，放還後兵部尚書花簡收之為義女，後杜器獻玉劍於

朝廷，又建奇功，與李珠娘成婚事。

【貨郎旦】參見卷一042條。

【富貴神仙】清鄭含成撰。南戲傳奇。二十八齣。有上海圖書館藏清乾隆間刻本、浙江圖書館藏烏絲蘭舊抄本。演山東諸生白玉虹，得神仙保佑，掘得金窖，中狀元，娶石念娘為妻，破賊建奇功，終歸仙班事。

戲曲用語注

【九轉貨郎兒】北正宮曲牌。

【末】卷一007條注參照。

通釈

先行する作品を下敷きにして戲曲を書くことを、（戲曲の）名家はいとわなない。王実甫（の雜劇『西廂記』）が董解元の『西廂記諸宮調』を下敷きになっているのは、その早い例である。ほかにも『寶娥冤』雜劇を下敷きに『金鎖記』伝奇が、『後庭花』雜劇を下敷きに『桃符記』伝奇が、『曲江池』雜劇を下敷きに『繡襦記』伝奇が、『合汗衫』雜劇を下敷きにして『羅衫記』伝奇が、『張生煮海』雜劇と『柳毅伝書』雜劇を下敷きにして『蜃中樓』伝奇が、『誤入桃源』雜劇を下敷きにして『長生樂』伝奇が作られている。更に元代の作品に基づきながら、わざと書き換えているものもある。すなわち『黄梁夢』雜劇の呂岩は（邯鄲夢）伝奇では）盧生に変わり、『麗春堂』雜劇の四丞相は（金貂記）伝奇では）尉遲敬德に変えられている。また（先行作品の）一部分を用いた作品もある。（『來生債』雜劇に基づいた）『兩生天』伝奇の羅和と『長生殿』伝奇の唐の玄宗皇帝の描き方は出藍の誉とまではいえないが、それぞれ見るべき所がある。ただ『夢釵緣』伝奇において、『西廂記』伝奇と『西

楼記』伝奇を直接踏襲し、つなぎ合わせているのは笑止千万である。また『玉剣縁』伝奇には（長生殿と同じく）「彈詞」という一幕がある。そもそも洪昇は（長生殿 伝奇で）元の人の『貨郎旦』雜劇の（九転貨郎兒）で末が「名は春郎と呼び、身は李を姓とする」と歌うのを踏襲し、「名は亀年と呼び、身は李を姓とする」としている。また『玉剣縁』に到っては「名は珠娘と呼び、身は李を姓とする」としているが、機械的な丸写しで、全くのお笑い草である。近頃の『富貴神仙』伝奇の作者に到っては、『玉剣縁』伝奇を踏襲しているが、これは『夢釵縁』伝奇が『西廂記』伝奇と『西楼記』伝奇を踏襲しているのと同じやり方である。このような類いは、いったい何のために作っているのか分からない。思いつくままにいくつかの例を挙げ、戒めとする。

（永土）

188 泰州張良御太史作〈陸吳州墓碑〉云：「公以餘力作為詞曲。《一帆》、《雙鳶》，流傳名部，皆取辦于杯茗立談之間。」

校注

【陸吳州墓碑】此文未見，待考。

人名注

【張良御】即清張符驤，號海房。江蘇泰州人。康熙六十（1721）年進士，官至翰林院庶吉士。著有《依歸草文集》等。

【陸吳州】即清陸舜，字符升。江蘇泰州人。康熙三（1664）年進士，官至浙江提學道。著有《雙虹堂詩文集》、《吳州文集》，以

及《一帆》、《雙鳶》等傳奇。

書名・作品名注

【一帆】清陸舜撰。南戲傳奇。見於〈陸吳州墓碑〉。佚。

【雙鳶】清陸舜撰。南戲傳奇。見於〈陸吳州墓碑〉。佚。

泰州の張符驤の「陸吳州墓碑」にいう。

陸舜は余興で戯曲を作った。『一帆』・『双鳶』は名作として伝わっているが、いずれもわずかの間に作った。

訳注

【泰州】現在の江蘇省泰州市。

【太史】漢代には、天文曆法や史書の編纂を司る官職であったが、明清時期には史書編纂を管轄する翰林院の別称として用いられた。

（山下）

189 卓珂月作〈孟子塞《殘唐再創》雜劇小引〉云：「作近體難於古詩，作詩餘難於近體，作南曲難於詩餘，作北曲難於南曲。總之，音調、法律之間，愈嚴則愈苦耳。北如馬、白、關、鄭、南如《荊》、《劉》、《拜》、《殺》，無論矣。人我明來，填詞者比比，大才大情之人，則大愆大謬之所集也，湯若士、徐文長兩君子其不免乎。減一分才情，則減一分愆謬，張伯起、梁伯龍、梅禹金，斯誠第二流之佳者。乃若彈駁愆謬，不遺錙銖，而無才無情，諸醜畢見，如臧顧渚者，可

勝笑哉。必也具十分才情，無一分愆謬，可與

馬、白、關、鄭、《荊》、《劉》、《拜》、《殺》頡頏之頑之者。而後可以言曲，夫豈不大難乎。求之近日，則袁晃公之《珍珠衫》、《西樓夢》、《寶娥冤》、《鸚鵡裘》，陳廣楚之《麒麟鬪》、《靈寶刀》、《鸚鵡洲》、《櫻桃夢》，斯為南曲之最。沈君庸之《霸亭秋》、《鞭歌伎》、《簪花髻》，孟子塞之《花前笑》、《桃源訪》、《眼兒媚》，斯為北曲之最。余平時定論蓋如此。今冬遭晃公、子塞於西湖，則晃公復示我《玉符》南劇，子塞復示我《殘唐再創》北劇，要皆感憤時事而立言者。晃公之作，直陳崔、魏事，而子塞則假借黃巢、田令孜一案，刺譏當世。夫北曲之道，聲止於三，齣止於四，音必分陰、陽，喉必用旦、末，他如楔子、務頭、襯字、打科、鄉談、俚諺之類，其難百倍於南，而子塞研討數年，其謹嚴又百倍於昔。至若釀禍之權璫，倡亂之書生，兩俱礫裂於片楮之中，使人讀之，忽焉發噓，忽焉號呶，忽焉纏綿而悱惻，則又極其才情之所之矣。於我所陳諸公十餘本之內，豈不又居第一哉。子塞將還會稽，別我於桃花巷中，酒杯在手，輿夫在旁，匆匆書此。」

校注

【孟子塞殘唐再創雜劇小引】明卓人月撰。收於卓人月《蟾臺集》，

今據《中國古代戲曲序跋集》所收本。

【陳廣楚之麒麟鬪】《中國古代戲曲序跋集》「楚」作「野」。

【沈君庸之霸亭秋】《中國古代戲曲序跋集》「霸」作「壩」。

【刺譏當世】《中國古代戲曲序跋集》「譏」作「激」。

【忽焉發噓】《中國古代戲曲序跋集》「噓」作「唏」。

人名注

【卓珂月】即明卓人月。參見卷二 070 條。

【孟子塞】即明孟稱舜。參見卷三 113 條。

【馬】即元馬致遠。參見卷一 033 條「馬東籬」注。

【白】即元白樸。參見卷一 048 條「白仁甫」注。

【關】即元關漢卿。參見卷一 041 條。

【鄭】即元鄭德輝。參見卷一 034 條「鄭德輝」注。

【湯若士】即明湯顯祖。參見卷二 070 條「湯若士」注。

【徐文長】即明徐渭。參見卷二 081 條「徐天池」注。

【張伯起】即明張鳳翼。參見卷一 034 條。

【梁伯龍】即明梁辰魚。參見卷一 034 條。

【梅禹金】即明梅鼎祚。參見卷二 084 條。

【臧顧渚】即明臧懋循。參見卷二 084 條。

【袁晃公】即明袁于令。參見卷三 119 條「簪菴」注。

【陳廣楚】即明陳與郊。本姓高，後入贅陳氏。浙江海寧人。萬曆

二（1574）年進士，官至太常寺少卿。著有《陳奉常集》，以

及《昭君出塞》、《文姬入塞》、《義犬記》等雜劇，《櫻桃夢》、

《靈寶刀》、《麒麟鬪》、《鸚鵡洲》等傳奇，編纂《古名家雜

劇》。

【沈君庸】即明沈自徵。參見卷三 117 條。

【崔】即明崔呈秀。北直隸薊州人。萬曆四十一年（1613）進士，官至兵部尚書。魏忠賢閹黨五虎之一。《明史》卷三百六有傳。

【魏】即明魏忠賢。參見卷三121條。

【黃巢】唐山東冤句人。本販鹽，乾符二（875）年應王仙芝舉兵，廣明元（880）年占長安，自稱帝，後兵敗自盡。《舊唐書》卷二百下、《新唐書》卷二百二十五下有傳。

【田令孜】唐四川人。本姓陳，字仲則。咸通中，從義父入內侍省為宦者。黃巢反，奉僖宗幸蜀，還京後其威權振天下。後為義子王建所殺。《舊唐書》卷一百八十四、《新唐書》卷二百八有傳。

書名・作品名注

【殘唐再創】一題《英雄成敗》。明孟稱舜撰。北雜劇。全名《憑義膽再創殘唐》，一作《鄭節度殘唐再創》。有《盛明雜劇二集》本、《醉江集》本。演唐時田令孜弄權，黃巢曹州起兵事。

【荊】即《荊釵記》。參見卷二074條。

【劉】即《劉知遠白兔記》。參見卷二076條。

【拜】即《拜月亭》。參見卷二076條。

【殺】即《殺狗記》。參見卷二076條。

【珍珠衫】明袁于令撰。南戲傳奇。《納書楹曲譜》中僅存《欲動》、《詰衫》二齣。事見《喻世明言》卷一〈蔣興哥重會珍珠衫〉。

【西樓夢】即《西樓記》。參見卷三119條。

【寶娥冤】即《金鎖記》。參見卷三120條。

【鸛鵲裘】明袁于令撰。南戲傳奇。四十四齣。有明末劍嘯閣原刻本。演司馬相如與卓文君奔成都，後發跡變泰事。本事見《史記》卷一百一十七〈司馬相如傳〉。

【麒麟齣】明陳與郊撰。南戲傳奇。三十六齣。有明萬曆四十五（1617）年海昌陳氏原刻本。演宋韓世忠與妓女梁紅玉成親事。係據明張四維《雙烈記》傳奇改變者。

【靈寶刀】明陳與郊撰。南戲傳奇。三十五齣。有明萬曆四十五（1617）年海昌陳氏原刻本。演宋林冲逼上梁山事。係據明李開先《寶劍記》傳奇改變者。事見《水滸傳》第二回至第九回。

【鸚鵡洲】明陳與郊撰。南戲傳奇。三十二齣。有明萬曆四十五（1617）年海昌陳氏原刻本、萬曆四十八（1620）年林於閨刊本等。係據明楊柔勝《玉環記》傳奇改變者。參見卷二082條「兩世姻緣」注。

【櫻桃夢】明陳與郊撰。南戲傳奇。三十五齣。有明萬曆四十五（1617）年海昌陳氏原刻本。演唐盧生夢中享受榮華富貴事。事見唐陳翰《異聞集·櫻桃青衣》。

【霸亭秋】參見卷三117條。

【鞭歌伎】參見卷三117條。

【簪花髻】參見卷三117條。

【花前笑】參見卷三113條「花前一笑」注。

【桃源訪】即《桃花人面》。一題《桃源三訪》。明孟稱舜撰。北雜劇。有《盛明雜劇》本、《柳枝集》本。演唐葉蓁兒相遇崔護，相思成疾而亡，後復甦成親事。事見唐孟棻《本事詩》。

【眼兒媚】明孟稱舜撰。北雜劇。全名《陳教授泣賦眼兒媚》。有

《盛明雜劇三集》本、《柳枝集》本。演陳誥賦（眼兒媚）詞，與歌妓江柳成親事。事見元蔣子正《山房隨筆》。

【玉符】即《玉符記》。明袁于令撰。南戲傳奇。《重訂曲海總目》、《今樂考證》著錄。佚。

戲曲用語注

【南曲】 參見卷一 032 條。

【北曲】 參見卷一 032 條。

【南劇】 即南戲傳奇。參見卷一 035 條「南戲」注。

【北劇】 即北雜劇。參見卷一 005 條「雜劇」注。

【齣】 此當指北雜劇之折。參見卷一 045 條「折」注。

【旦】 參見卷一 006 條。

【末】 參見卷一 007 條。

【楔子】 參見卷一 045 條。

【務頭】 曲中文辭、音律兼長，使觀眾喝彩，作品中最精彩之處。

【襯字】 曲詞中，正字之外所增加之字。

【打科】 猶插科打諢。

【鄉談】 戲曲中用方言而說之白。

【俚諢】「俚」即俚語，「諢」即插科打諢。

通釈

卓人月の「孟子塞『殘唐再創』雜劇小引」にいう。

近体詩を作るのは古詩よりも難しく、詞を作るのは近体詩よりも難しく、南曲を作るのは詞よりも難しく、北曲を作るのは南曲よりも難しい。つまり、音韻と格律の關係が厳密であればあるほど難儀になる。北曲であれば馬致遠・白樸・閔漢卿・鄭德輝、南曲であれば『荆釵記』・『白兔記』・『拜

月亭』・『殺狗記』などが（音韻・格律を守って作られていることは）言うまでもない。しかし我が明朝になってから、戲曲を作るものが次々と現れたが、才氣と情感に溢れた作品を書く人と言え、間違いだらけになっている。湯顯祖・徐渭の両先生も例外ではない。才氣と情感が少し落ちると、間違いもその分減る。張鳳翼・梁辰魚・梅鼎祚は、それに次ぐ人たちの中では比較的良くできている。誤りを余すところなく指弾するような者は、才氣と情感が無く、様々な欠点なことごとく現れており、臧懋循のような輩は嘲笑されるべきであろう。才氣と情感を充分にそなえ、少しも間違いが無ければ、（それedyやく）馬致遠・白樸・閔漢卿・鄭德輝・『荆釵記』・『白兔記』・『拜月亭』・『殺狗記』などと甲乙つけがたいものとなる。その上ではじめて戲曲として論じることができ、そうしたものは得難いことこの上ない。近ごろの人々の間から探すとすれば、袁于令の『珍珠衫』・『西樓記』・『金鎖記』・『鸚鵡裘』、陳与郊の『麒麟閣』・『靈宝刀』・『鸚鵡洲』・『桜桃夢』などは、南曲のうち最も優れたもので、沈自微の『霸亭秋』・『鞭歌伎』・『簪花髻』、孟称舜の『花前一笑』・『桃花人面』・『眼兒媚』などは、北曲のうち最も優れたものである。私は常日頃からこのように論断していた。この冬、杭州の西湖で袁于令と孟称舜に会ったが、袁于令は『玉符記』伝奇をまた私に見せ、孟称舜が『殘唐再創』雜劇をまた私に見せてくれた。いずれも昨今の政治情勢に憤って物申したものである。袁于令の作品は、崔呈秀・魏忠賢の話をそのまま描き、また孟称舜は黄

巢・田令孜の事件に借りて当世を諷刺している。そもそも北曲のやり方は、声調は三つだけ、折も四つだけしかなく、またそれぞれの声調も必ず陰と陽を区別しなければならず、歌える者は必ず旦か末（のどちらか）を用いなければならず、そのほか楔子・務頭・字余り・お笑い・郷談・俚諺などの決まりがあるので、南曲より百倍も難しい。孟称舜は何年も研究し、その厳密さは以前に百倍するものである。災いをもたらした権勢を有する宦官（である田令孜）と、騒乱を起こした科挙受験生（である黄巢）は、両者ともに作中ではりつけにされており、これを読んだならば、ふと嘆息したり、ふと感嘆の声を上げたり、ふと切々とした悲しみにとらわれたりするのであり、それは作者が才能と情感の方向を突き詰めているからである。先に挙げた諸先生の十数作の中でも首位にならないことがあるか。孟称舜が会稽に帰るにあたり、桃花巷で私と惜別の宴を催し、かごかきが隣で待つ中、慌ただしくこれを記す。

訳注

【声調は三つだけ】中古漢語では平・上・去・入の四つの声調があり、南方音に依る南戲伝奇もこれに従うが、北雜劇では入声を平・上・去に配する北方音を尊重することを指す。

【桃花巷】現在の浙江省杭州市上城区留華巷。

（山下）

190 卓珂月又有《百寶箱》傳奇引云：「昔者《玉玦》之曲，風刺寓焉，刻畫青樓，殆無人

色。嗣賴汧國一事，差為解嘲，然後漸出墨池而登雪嶺。乃余覽白行簡所述李娃始末，頗多微詞者，何歟。歸自竹林，憩于姨宅，目笑手揮，以他語對，蟬蛻之局，娃與聞之矣。迨夫雪中抱頸，擁入西廂，懼禍及身，非得已也。必可以生青樓之色、唾白面之郎者，其杜十娘乎。此事不知誰所覩記，而潘景升錄之于《互史》，宋秋士採之于《情種》，今郭彥深復演之為《百寶箱》傳奇，蓋皆傷之甚也。」

校注

【百寶箱傳奇引】明卓人月撰。收於《蟾臺集》，今據《中國古代戲曲序跋集》所收本。

【登雪嶺】《中國古代戲曲序跋集》「雪」作「雲」。

【頗多微詞者】《中國古代戲曲序跋集》「詞」作「辭」。

【潘景升錄之于互史】此書見於《互史》內紀卷十（杜十娘）。

【宋秋士採之于情種】此書見於《情種》卷四（負情儂傳）。按：

（負情儂傳）實為宋秋士明宋懋澄所撰，收於《九籀別集》卷四，宋存標據之抄襲。

人名注

【卓珂月】即明卓人月。參見卷二070條。

【汧國】即唐李娃。唐白行簡《李娃傳》中人物。原為長安妓女，後嫁榮陽公之子，封汧國夫人。參見卷二095條「李亞仙」注。

【白行簡】唐陝西下邳人。字知退。白居易之弟。貞元二十一年（805）年進士。官至主客郎中。著有《李娃傳》。《舊唐書》

卷一百六十六、《新唐書》卷一百十九有傳。

【李娃】參見「汧國」注。

【杜十娘】明萬曆間北京教坊司妓女，願與李甲結為夫婦，而為李甲所賣與孫富，後投江而死。見明宋存標《負情儂傳》、明馮夢龍《警世通言》卷三十二（杜十娘怒沉百宝箱）等。

【潘景升】即明潘之恆。字景升，號鸞嘯生、冰華生。安徽歙縣人。萬曆間國子監生。工詞曲，與湯顯祖、沈璟、張鳳翼等友善。編輯《盛明雜劇》，著有《互史》、《鸞嘯小品》、《涉江集》等。

【宋秋士】即明宋存標。字子建，號秋士。上海松江華亭人。崇禎十五（1642）年福貢，候補翰林院孔目。著有《皇明都俞錄》、《秋士史疑》、《情種》等。

【郭彥深】即明郭濬。號默庵，浙江海寧人。順治九（1652）年進士。著有《虹映堂集》以及《百寶箱》傳奇等。

書名・作品名注

【百寶箱】明郭濬撰。南戲傳奇。見於明卓人月《百寶箱傳奇引》。佚。按：清梅窗主人亦有《百寶箱》傳奇。

【玉玦】即明鄭若庸《玉玦記》傳奇。參見卷二084條。

【自行簡所述李娃始末】即唐自行簡《李娃傳》。參見卷二094條。

【互史】明潘之恆輯。類書。分內紀內篇、外紀外篇、雜紀雜篇，廣輯瑣談怪異雜記之類。有《四庫全書存目叢書》所收浙江圖書館藏明刻一百一十一卷本。

【情種】明宋秋士撰。四卷。廣載各代俠客、妓女等傳記，多為抄自宋懋澄、陳繼儒等著作。有《北京圖書館古籍珍本叢刊》所收明天啓間翁少麓刊本。

通釈

卓珂月にまた「『百寶箱』伝奇引」があり、以下のようにいう。かつて『玉玦記』伝奇には風刺が込められ、妓楼を事細かに描写して、人々を青ざめさせた。続いて李娃の物語を援用し、強いて（妓楼に入り浸ることの）釈明をした後、ようやく科挙受験生として勉強し、高い地位に上り詰めるのだ。私が自行簡の著した『李娃伝』を読んでみると、（李娃への）婉曲な批判がたくさん込められていたが、それはどういうことだろう。（願掛けのために行った）竹林からの帰り道、叔母の家で休憩し、にこやかな顔で手を振り、他の話でごまかし、抜け出して逃げた場面では、（公子を追い払う計略に）明らかに李娃も関与している。雪の中で（二度は捨てた公子の）頭を抱きかかえて介護し、西のはなれに連れて行つたのに至つては、災いがわが身に及ぶのを恐れ、やむを得なかったからだ。（しかしそこで）遊郭の妓女らしく怒り、色男に唾した者が、杜十娘であろう。この話は誰が見て書いたのかは解らないが、潘之恒が『互史』に収録し、宋存標が『情種』に採り、今回さらに郭濬が『百寶箱』伝奇に仕立てたのは、いずれもたいへんに悼むところがあったためだろう。

訳注

【手を振り】原文は「揮手」。『李娃伝』で、立ち去る李娃に付いて行こうとする公子を引き留める場面に見える。

【他の話でごまかし】原文は「以他語対」。『李娃伝』で、李娃が公子に「ここは叔母の家か」とたずねられる場面に見える。

191 詹允龍雷岸有《瓊花夢》雜劇，河陽趙士麟為之序，見《讀書堂文集》。又作《詹允詩序》云：「雷岸未顯時，著有《瓊花夢》傳奇劇本。予早年讀之，訝曰：『此言夢也，而非夢者能言之也。』既而雷岸以博學宏詞薦，由檢討而宮允。文章、詞賦，冠絕一時。」

校注

【河陽趙士麟為之序】此序見於《瓊花夢》卷首，亦見於《讀書堂綠衣全集》卷十三。

【詹允詩序】即《詹允龍雷岸詩序》。見於《讀書堂綠衣全集》卷十四。

【雷岸未顯時】《詹允龍雷岸詩序》「岸」下有「當」字。

【以博學宏詞薦】《詹允龍雷岸詩序》下有「上親試擢之」五字。

人名注

【龍雷岸】即清龍變。清安徽望江人。字理侯，號石樓，又號改庵、雷岸。康熙十八（1679）年舉博學宏詞科，官至詹事府左中允。工詩詞，著有《芙蓉城》雜劇、《江花夢》傳奇。

【趙士麟】清雲南河陽人。字麟伯，號玉峰。康熙四（1664）年進士。官至吏部左侍郎。著有《讀書堂綠衣全集》、《敬一錄》、《讀書堂法帖》等。

書名・作品名注

【瓊花夢】一名《江花夢》。清龍變撰。南戲傳奇。二十八齣。有

清乾隆四十二（1777）年重刻《龍改庵二種曲》本、趙景深舊藏鈔本。演荊州江霖，憑夢中所得一箋一劍，並娶袁餐霞與鮑雲姬事。

通釈

【讀書堂文集】參見卷首引用書目。

詹允であつた竜變に『瓊花夢』伝奇があり、河陽の趙士麟の序文が『讀書堂文集』に見える。（趙士麟は）また「詹允竜雷岸詩序」を書いており、以下のように見える。

竜變は出世する以前に、『瓊花夢』伝奇を書いた。私のかつてそれを読んで、「これは夢を語つたものであるが、夢を見たものには語りえないものである」といふかしく思ったものだが、その後、竜變は博學宏詞科に推薦され、檢討から詹允に拔擢された。文章・詩歌ともに、一時期並び立つものがいなかった。

訳注

【詹允】詹事府左右中允のこと。詹事府は本来、太子を補佐する官署であるが、清の康熙年間に立太子制が廃されたため、翰林院の補助的機構となつた。

【河陽】現在の雲南省玉溪市澂江県。

【博學宏詞科】博學鴻儒科・博學鴻儒科とも称する。通常の科擧の試験以外に、優れた人物を得るために特別に実施される試験。

【檢討】翰林院檢討の略称。清代、文史の編纂を司る官で、科擧の上位合格者三名が初めに任じられるのが通例であつた。

（千田）

192

尤西堂《鈞天樂·自記》云：「丁酉之秋，薄游太末。主人謝客，阻兵未得歸。逆旅無聊，追尋往事，忽忽不樂。漫填詞為傳奇，率日一齣。齣成，則以酒澆之，歌呼自若。閱月而竣，題曰《鈞天樂》。家有梨園，歸則授使演焉。明年科場弊發，有無名子編為《萬金記》。制府以聞，詔命進覽，其人匿弗出，臬司某，大索江南諸伶雜治之。適山陰姜侍御還朝，過吳門，亟徵予劇。同人宴之申氏堂中。樂既作，觀者如堵牆，靡不咋舌駭歎。而邏者亦雜其中，疑其事類，馳白臬司。臬司以為奇貨，即檄捕優人，拷掠誣服。既得主名，將窮其獄，且徵賄焉。會有從中解之者，而予已入都，事得寢。己亥大計，臬司以貪墨亡命，真極典，籍其家，聞者快之。」西堂又有《讀離騷》、《弔琵琶》、《桃花源》、《黑白衛》、《李白登科記》五種。《李白登科記》，白狀元，杜甫榜眼，孟浩然探花，立格最奇。

校注

【鈞天樂自記】見於《鈞天樂》卷首。

【編為萬金記】《鈞天樂·自記》下有「者」字。

【而予已入都】《鈞天樂·自記》下有「門」字。

人名注

【尤西堂】即清尤侗。參見卷三117條「尤展成」注。

【主人】按：此當指清袁國梓。袁國梓，字丹叔。南直隸華亭人。

順治六（1649）年進士，官至衢州知府。著有《嘉興府志》。

【制府】按：此時任江南江西總督者為郎廷佐。郎廷佐，字一柱。漢軍鑲藍旗人。官至兩江總督。鄭成功之圍南京，力戰而退之。《清史稿》卷二百七十三有傳。

【臬司某】按：此時任江南按察使者為盧慎言。盧慎言，直隸晉州人。順治間官生，官至江南按察使。順治十五（1657）年，其貪贓案發，明年被處凌遲。

【姜侍御】即清姜圖南，字匯思。浙江山陰人。順治六（1649）年進士。官至御史。

【李白】參見卷四150條「李」注。

【杜甫】參見卷四150條「杜」注。

【孟浩然】唐襄州襄陽人。諱浩，以字行。終生不就官途。頗有詩名，與王維、李白、張九齡有交往。著有《孟浩然集》。《舊唐書》卷一百四十、《新唐書》卷二百三有傳。

書名·作品名注

【鈞天樂】參見卷三117條。

【萬金記】清無名氏撰。南戲傳奇。見於清尤侗《鈞天樂·自記》。佚。

【讀離騷】清尤侗撰。北雜劇。有《西堂曲腋六種》舊抄本、清康熙間聚秀堂原刻《尤西堂全集》本、《清人雜劇初集》本。演楚大夫屈原被貶，做《天問》以問天，做《九歌》以迎神，見漁夫而投江事。

【弔琵琶】清尤侗撰。北雜劇。有《西堂曲腋六種》舊抄本、清康熙間聚秀堂原刻《尤西堂全集》本、《清人雜劇初集》本。演漢元帝聽琵琶聲召見王昭君，觀其美貌封為妃，毛延壽投

匈奴，獻王昭君圖像，單于興兵壓境，元帝不得已獻王昭君，至交河投水而死事。此條顛覆昭君出塞事者，事見《西京雜記》。

【桃花源】清尤侗撰。北雜劇。有《西堂曲腋六種》舊抄本、清康熙間聚秀堂原刻《尤西堂全集》本、《清人雜劇初集》本。演東晉陶潛歸田自適，入桃源洞成仙事。

【黑白衛】清尤侗撰。北雜劇。有《西堂曲腋六種》舊抄本、清康熙間聚秀堂原刻《尤西堂全集》本、《清人雜劇初集》本。演唐魏博鎮大將軍聶鋒之女聶隱娘，幼時受劍術於終南山老尼，父母亡故後，投陳許節度使劉昌裔，屢退田季安之刺客，後辭去劉昌裔上終南山事。事見唐裴鉞《聶隱娘傳》。

【李白登科記】亦名《清平調》。清尤侗撰。北雜劇。一折。有《西堂曲腋六種》舊抄本、清康熙間聚秀堂原刻《尤西堂全集》本、《清人雜劇初集》本。演唐玄宗開科，楊玉環閱讀試卷，李白中狀元，杜甫中榜眼，孟浩然中探花事。

戲曲用語注

【宴之申氏堂中】此當指用申府家班演戲。申府家班，原為明萬曆間申時行之家班，匯集名伶，甲於吳下。其子用懋、用嘉，孫紹芳，皆繼承家班，清康熙初年仍演戲。

通釈

尤侗の『鈞天樂自記』にいう。

丁酉⁽¹⁶⁵⁷⁾年の秋、太末に旅した。主人（の袁国梓）が客を謝絶したが、兵乱に阻まれて帰宅できなかった。このため旅先ですることなく、以前の（科挙に落第した）ことを思い返しては悶々としていた。そこでそぞろに作詞して伝

奇を作った。おおよそ一日一齣の速さで、齣ができれば酒の肴にし、泰然として歌った。一月ほどで完成し、『鈞天樂』と題した。家に劇団を抱えていたので、帰るとすぐに（台本を）授けて演じさせた。翌年、科挙不正事件が明るみに出ると、ある者がそのことを『万金記』という劇に仕立てた。総督はそれを耳にして、台本の提出を命じたが、作者が隠して提出しなかったため、提刑按察使の某が、大いに江南の役者たちを捜査し取り締まった。折しも監察御史であった山陰の姜閔南が朝廷に戻る際に呉門を通りかかり、急遽私の劇を所望された。そこで仲間内で申氏の館に宴を開いた。音曲が始まると、見物人は摒のように取り囲み、一人として舌を巻いて驚嘆しないものはなかった。ところが見回り役がその中に紛れており、物語が『万金記』と似ているのを怪しみ、提刑按察使に注進した。提刑按察使はこれを奇貨として、直ちに役者を捕らえさせ、拷問にかけて無実の罪に陥れた。主（である私）の名を得ると、事件を究明しようとする一方で袖の下を要求してきたが、ちょうど中に立つて弁護してくれる人がおり、また私も既に都に入っていたので、沙汰やみとなった。己亥⁽¹⁶⁵⁹⁾年の地方官審査で、提刑按察使は汚職および素行不良によって極刑に処せられ、家財没収となった。それを耳にしたものはみな溜飲を下げた。

尤侗にはこのほか『読離騷』・『弔琵琶』・『桃花源』・『黑白衛』・『李白登科記』の五種の戯曲がある。『李白登科記』は、李白を状元、杜甫を榜眼、孟浩然を探花とするもので、組み立てがなかな

かに面白い。

訳注

【太末】現在の浙江省衢州市竜游県。

【總督】原文「制府」。清代、地方の最高長官で、一―三省を管轄した。

【監察御史】原文「侍御」。卷三111訳注参照。

【提刑按察使】原文「臬司」。明清代、一省の司法を司る長官。

【山陰】卷三113訳注参照。

【吳門】江蘇省蘇州一帯の別称。

【状元】科挙の主席合格者のこと。

【榜眼】科挙の第二位合格者のこと。

【探花】科挙の第三位合格者のこと。

(千四)

193

西堂へ題《北紅拂記》云：「愚謂元人北曲，若以南詞關目參之亦可。兩人接唱，合場和歌，中間間以蘇白，插科打諢，無施不可，又為梨園子弟別闢蠶叢。此意無人解者，今於荔軒先生遇之。唐人小說傳衛公、紅拂、虬髯客故事，吾吳張伯起新婚伴房，一月而成《紅拂記》，風流自許。浙中凌初成更為北劇，筆墨排纂，頗欲睥睨前人。但一事分為三記，有疊牀架屋之病。荔軒復取而合之，大約撮其所長，決其所短，又添徐洪客〈採藥〉一折，使史家附傳之法。」

校注

【題北紅拂記】此文收於清尤侗《良齋倦稿文集》卷九（王申雜文）。

【愚謂元人北曲】《良齋倦稿文集》上有「案頭之書，場上之曲，二者各有所長。而南北因之異調。元人北曲固自擅場，但可被之弦索，若上場頭一人單唱，氣力易衰，且賓白寥寥，未免冷淡生活。變而南音，徘徊宛轉，觀者耳目俱靡。其移人至矣。然王實甫《西廂》一經李日華改竄，幾於點金成鐵。北之日趨而南也，雖風氣使然，寧無古調不彈之嘆乎」一百一十九字。

【梨園子弟】《良齋倦稿文集》「子弟」作「弟子」。

【別闢蠶叢】《良齋倦稿文集》「別」作「另」。

【虬髯客故事】《良齋倦稿文集》下有「英雄兒女，各具本色」八字。

【風流自許】《良齋倦稿文集》下有「乃其命意遣詞，委爾殊甚。

即如《私奔》一齣，『夜深誰個叩柴扉』，齊微韻也。『顛倒衣裳試觀渠』，魚虞韻也。『紫衣年少俊龐兒』，支思韻也。以一曲而韻雜如此，他可知矣」六十一字。

【有疊牀架屋之病】《良齋倦稿文集》下有「體格口吻，猶倣元人，未便闌入紅牙翠管間也」十八字。

【決其所短】《良齋倦稿文集》「決」作「汰」，下有「介白全出自運，南北門筭，巧若天成」十四字。

【徐洪客採藥一折】即《北紅拂記》第九折〈採藥〉。

【使史家附傳之法】《良齋倦稿文集》「使」作「得」，下有「正如虎頭寫照，更加頰上三毛，神彩倍發。豈惟青出於藍乎。荔

軒游越五日，倚舟脫稿，歸授家伶演之，予從曲宴得寓目焉。既復示余此本，則案頭之書，場上之曲，兩臻其妙，雖周郎復起，安能為之一顧乎。於是擊節欣賞而題其後」八十八字。

人名注

【西堂】即清尤侗。參見卷三116條「尤展成」注。

【荔軒】即清曹寅。參見卷三122條「曹銀臺子清」注。

【衛公】即唐李靖。參見卷二091條「李衛公」注。

【紅拂】即唐人小說《虬髯客傳》中人物。本名張出塵，初為楊素家妓，後識李靖，與之私奔為妻。

【虬髯客】即唐人小說《虬髯客傳》中人物。隋末俠客。初懷大志，相李世民，知天命所歸，渡扶餘國為王。

【張伯起】即明張鳳翼。參見卷一034條。

【凌初成】即明凌濛初。字玄房，號初成。浙江烏程人。崇禎七(1634)年為副貢生，出任上海縣丞，崇禎十五(1642)年累選

徐州通判。編纂小說集《初刻拍案驚奇》、《二刻拍案驚奇》，著有《紅拂三傳》、《衫襟記》、《合劍記》、《雪荷記》等傳奇。

【徐洪客】隋唐間泰山道士。致書李密，獻取天下之計。見於《資治通鑑》卷一百八十四。

書名・作品名注

【題北紅拂記】清尤侗撰。見於《良齋倦稿文集》卷九。據東洋文庫藏《西堂餘集》清刊本。《北紅拂記》，清曹寅撰。北曲傳奇。十一折。有上海圖書館藏康熙間刊本、中國藝術研究院藏清鈔本。事見唐人小說《虬髯客傳》。明張鳳翼《紅拂記》傳奇、明凌濛初《紅拂三傳》雜劇亦演此事。參見卷

三124條「紅拂記」注。

【紅拂記】參見卷三124條。

【唐人小說】即唐人小說《虬髯客傳》。唐張說撰，或題唐杜光庭撰。收於《太平廣記》卷一百九十三。敘唐李靖補弼唐太宗定天下事。

【更為北劇】即明凌濛初《虬髯翁》、《莽擇配》、《驀忽姻緣》等三種北雜劇，合稱《紅拂三傳》。《虬髯翁》，一名《正本扶餘國》，全名《虬髯翁正本扶餘國》。有《盛明雜劇二集》本。演隋末俠客虬髯客初懷大志，相李世民，知天命所歸，渡扶餘國為王事。《莽擇配》，全名《識英雄紅拂莽擇配》。有明末精刊本。演隋末妓女紅拂與李靖為夫妻，補弼唐太宗，統一天下事。《驀忽姻緣》，《遠山堂劇品》著錄。佚。參見卷三124條「紅拂記」注。

戲曲用語注

【關目】此指戲曲班演之結構、構思。參見卷三124條「關白」注。

【蘇白】用蘇州土話之說白。

【插科打諢】諷謔說白與滑稽動作。參見卷四183條「科諢」注。

通釈

尤侗の「題『北紅拂記』」にいう。

思うに、元代の北雜劇に、南戲傳奇の上演構成を交えるのもわるくない。(北雜劇には本来ないが)一人の後をうけてもう一人が歌う、舞台の全員が主役に和して歌う、間に蘇州なまりのセリフや、こっけいなセリフとしぐさを交えるなど、どれを加えてもよい。役者たちにとつても、これらは新機軸となるだろう。こうした趣向を解するものはこれ

までいなかったが、近ごろ曹寅の作品でその趣向を取り入

れているのに出会った。唐代伝奇（の『虬髯客伝』）は李靖・

紅弘・虬髯客らの物語を伝えている。（それをもとに）わが

蘇州の張鳳翼は新婚にあたり寝室のお供として一月のうちに『紅弘記』を書き上げ、自ら風流を任じた。浙中の凌濛

初はこれを北雜劇に改作し、力強い筆致で、先人を超えん

ばかりであった。しかし一つの物語を三つの戯曲に分けた

ため、屋上屋を重ねたきらいがある。曹寅はそれらを再び

一つに合わせ、全般に良いところをとり、悪いところを削っ

ている。また徐洪客が登場する「採藥」の一折を加え、歴

史家の行う（ある人物の本伝に別の人物の）伝をつけ足す方法

を用いている。

訳注

【浙中】 浙江中部を指す。卷三105訳注参照。

（川）

194 《玉鏡臺》 演溫太真事，《投梭記》 演謝幼輿事，

《花筵賺》 合太真、幼輿而演之。《投梭》 筆墨

雅潔，情詞婉妙為勝。

人名注

【溫太真】即晉溫嶠，字太真。太原祁人。舉秀才，投劉琨軍，屢建武功。官至驃騎將軍、開府儀同三司。《晉書》卷六十七有傳。

【謝幼輿】即晉謝鯤，字幼輿。陳郡陽夏人。東海王越辟為掾，後

王敦引為長史。官至豫章太守。《晉書》卷四十九有傳。

書名・作品名注

【玉鏡臺】即明朱鼎《玉鏡臺記》。南戲傳奇。四十齣。有明末汲

古閣原刊本、《六十種曲》本。演晉溫嶠以玉鏡臺為聘，與

劉潤玉成婚，後戰亂中離散，隨祖逖建奇功，夫妻團圓事。

事見《晉書》卷六十七（溫嶠傳），元關漢卿《玉鏡臺》雜

劇亦演此事。

【投梭記】參見卷四158條。

【花筵賺】明范文若撰。南戲傳奇。二十九齣。有明崇禎間博山堂

原刊本、明崇禎間山水鄰刻本、明末烏衣巷刻本等。以溫嶠

玉鏡臺、謝鯤投梭事，合為一事。參見卷四194條「玉鏡臺」

注、卷四158條「投梭記」注。

通釈

『玉鏡台』は溫嶠の物語を演じ、『投梭記』は謝鯤の物語を演じ、『花筵賺』は溫嶠と謝鯤の事を合わせて演じている。そのうち『投梭記』は筆致が格調高く清らかで、愛情をうたう歌詞は情緒でんめんとしているところがよい。

（川）

195 偶於市間得一寫本《種鱗書屋外集》，兩劇：一，

《蓬島瓊瑤》，為余本忠收服海寇事。一，《花目

題名》，則品題花目，以郁李為狀元，海桐為榜

眼，紅梅為探花，木樨為傳臚，杜鵑下第，而以

丁香配郁李，卷首題田民撰。

人名注

【余本忠】生平未詳，待考。

【田民】生平未詳，待考。

書名・作品名注

【種鱗書屋外集】田民撰。佚。

【蓬島瓊瑤】田民撰。佚。

【花目題名】田民撰。佚。

通釈

たまたま、市中で『種鱗書屋外集』なる写本を手に入れたところ、二つの戯曲を収めていた。一つは『蓬島瓊瑤』といい、余本忠が海賊を平定する物語を演ずる。もう一つは『花目題名』といい、花の種類を番付にしたもので、郁李を状元とし、海桐を榜眼、紅梅を探花、木樨を伝臚とし、杜鵑は落第し、丁香を郁李の妻とする。巻首には田民撰とある。

訳注

【状元】巻四192訳注参照。

【榜眼】巻四192訳注参照。

【探花】巻四192訳注参照。

【伝臚】殿試の第一位から第三位を第一甲と呼び、以下の若干名を第二甲と呼ぶ。伝臚は第二甲の首位の別名。

(川)

196 孫俛，字商聲。詩、古文簡潔有法度。性孤冷，不喜諧俗。每就研席，輒怒其館主，不合而去。所著《海棠緣》傳奇，痛詆僞父，蓋以此也。

校注

【孫俛字商聲】按：此條乃清鈕琇《觚賸》卷一〈憤僧投池〉之節略。下有「張西廬先生高弟也」八字。

【不喜諧俗】《觚賸》下有「自康熙癸卯西廬遭變後，嘗謂：『斯文既喪，世無可交者。乃於此齷齪輩同其食息，不如無生。』故有『一生不得文章力，百里曾無臭味人』之句」五十三字。

人名注

【孫俛】清浙江烏鎮人。字商聲。康熙間在世。吳江張雋之門人。

著有《海棠緣》傳奇。

書名・作品名注

【海棠緣】清孫俛撰。南戲傳奇。佚。

通釈

孫俛、字は商聲。その詩や古文は、簡潔で格律にかなっていた。孤高の人で、時流におもねらなかった。学館で学んだが、そのたびに学館の主の腹を立て、そりが合わず立ち去った。(孫俛の師張雋は文字の獄「明史案」に連座して処刑されており)彼の著した『海棠縁』伝奇が、満洲人を痛罵しているのは、おそらくこのためであろう。

訳注

【学館の主】原文「館主」。科挙受験のための学校である学館の主。【満洲人を痛罵】原文「痛詆僞父」。「僞父」は北方人の蔑称。こ

こでは満洲人を指す。

(川)

劇說

附校注
附：譯注稿

卷五

江都 焦循 撰

197

《戰國策》云：「齊軍破，淖齒殺閔王於鼓里，太子乃解衣免服，逃太史之家，為溉園。君王后，太史后氏女，知其貴人，善事之。田單復齊，遽迎太子於莒，立之以為王，君王后以為后。」

《史記·田敬仲世家》云：「樂毅出臨淄，潛王出亡，之衛。衛君辟宮舍之，稱臣而共具。潛王不遜，衛人侵之。潛王去，走鄒、魯，有驕色，鄒、魯君弗內，遂走莒。楚使淖齒將兵救齊，遂殺潛王，而與燕共分齊之侵地。潛王之遇殺，其子法章變名姓為莒太史敫家庸。太史敫女奇法章狀貌，以為非恆人，憐而嘗竊衣食之，而與私通焉。襄王既立，立太史氏女為王后。太史敫曰：

『女不取媒因自嫁，非吾種也，汙吾世。』終身不覩君王后。君王后賢，不以不覩故失人子之禮。」張伯起全本此以作《灌園記》。馮猶龍刪改正之，序云：「奇如《灌園》，何可無傳。而傳奇如世所傳之《灌園》，則吾謂其無可傳，且憂其終不傳也。法章以亡國之餘，父死人手，身為

人奴，此正孝子枕戈、志士臥薪之日，不務憤悱憂思，而汲汲焉一婦人之是獲，少有心肝必不乃爾。且五六年間，音耗隔絕，驟爾黃袍加身，而父仇未報也，父骨未收也，都不一置問，而惓惓焉訊所思得之太傅，又謂有心肝乎。君王后千古女俠，一再見而遂失身，即史所稱陰與之私，談何容易。而王孫賈子母忠義，為嗣君報終天之恨者，乃棄不錄。若是，則灌園而已，私偶而已。灌園、私偶，何奇乎，而何傳乎。伯起先生云：『吾率吾兒試玉峰，舟中無聊，率爾弄筆，遂不暇致詳。』誠然歟，誠然歟。自余加改竄，而忠、孝、志、節，種種具備，庶幾有關風化而奇可傳矣。」馮氏此言，可為傳奇之式，故錄之。然太史敫可稱潔士，故《迎后登車》一折，寫君王后別母，而敖不與見，曲云：「只得遙拜著鐵錚錚的家主，恕饒了癡騃騃的女娃。」以角色不足，故太史敫以淨扮之耳。

校注

【戰國策】此文見於卷十一（齊）四。

【齊軍破淖齒】《戰國策》無「淖齒」二字。

【殺閔王於鼓里】《戰國策》上有「向子以輿一乘亡。達子收餘卒，復振，與燕戰，求所以償者，閔王不肯與，軍破走。王奔莒，淖齒數之曰，夫千乘、博昌之間，方數百里，兩血沾衣，王知之乎。王曰，不知。人有當闕而哭者，求之則不得，去之

則聞其聲，王知之乎。王曰，不知。淖齒曰，天雨血沾衣者，天以告也。地圯至泉者，地以告也。人有當闕而哭者，人以告也。天地人皆以告矣，而王不知戒焉，何得無誅乎。於是「一百三十九字」。

【太史后氏女】《戰國策》無「后」字。

【田單】《戰國策》下有「以即墨之城，破亡餘卒，破燕兵，紿騎劫，遂以」十七字。

【立之以為王】《戰國策》下有「襄王即位」四字。

【史記田敬仲世家】按：「田敬仲」下當有「完」字。此文見於卷四十六〈田敬仲完世家〉。

【樂毅出臨淄】《史記》「出」作「遂入」。下有「盡取齊之寶藏器」七字。

【楚使淖齒將兵救齊】《史記》下有「因相齊潛王。淖齒」七字。

【而與燕共分齊之侵地】《史記》下有「鹵器」二字。

【憐而嘗竊衣食之】《史記》「嘗」作「常」。

【而與私通焉】《史記》下有「淖齒既以去莒，莒中人及齊亡臣相聚求潛王子，欲立之。法章懼其誅已也，久之，乃敢自言，我潛王子也。於是莒人共立法章，是為襄王。以保莒城而布告齊國中，王已立在莒矣」六十八字。

【立太史氏女為王后】《史記》下有「是為君王后，生子建」八字。

【序云】即《新灌園》傳奇〈敘〉。

【則吾謂其無可傳】《新灌園》「吾」作「愚」。

【而惓惓焉訊所思得之太傅】《新灌園》「得」作「德」。

【乃棄不錄】《新灌園》「乃」作「反」。「棄」下有「置」。

【伯起先生云】按：此語所據未詳，待考。

【迎后登車】即《新灌園》第三十五齣。

人名注

【淖齒】戰國楚人。奉命將兵救齊，潛王拜之為相，後殺潛王，與燕共分齊地。見於《史記》卷四十六〈田敬仲完世家〉。

【君王后】戰國齊襄王后。太史敫之女。或說后乃姓，君王后即襄王后妃后氏之意。

【閔王】即戰國齊潛王。

【田單】戰國齊臨淄人。燕國樂毅伐齊，盡降齊城，即墨人舉之為將，用反間計、火牛計大敗燕師，迎襄王而立之。封安平君。

《史記》卷八十二有傳。

【樂毅】戰國魏人。燕昭王拜為上將，率五國兵伐齊，下七十餘城。惠王立，中反間計，以騎劫代之，乃降趙。及敗師，惠王以書謝之，遂為趙燕二國客卿戰國魏人。《史記》卷八十有傳。

【潛王】即戰國齊潛王田地。齊宣王之子，在位十七年。見於《史記》卷四十四〈魏世家〉。

【衛君】即戰國衛惠公。

【鄒魯君】鄒君即戰國鄒王。魯君即戰國魯頃公。

【法章】即戰國齊襄王。潛王之子。田單破燕軍迎而立之在位十九年。見於《史記》四十六〈田敬仲完世家〉。

【太史敫】戰國齊莒人。其女為襄王之后，責其不媒而嫁，終身不覩。或為后姓。

【襄王】即戰國齊襄王。潛王之子。田單破燕軍，迎而立之，盡復齊國故土。見於《史記》卷四十六〈田敬仲完世家〉。

【張伯起】即明張鳳翼。參見卷二092條。

【馮猶龍】即明馮夢龍。參見卷三119條。

【王孫賈子母】王孫賈，戰國齊大夫。年十五仕潛王。淖齒之殺潛王，其母勸賈討賊，遂糾合市人，刺殺之。

書名・作品名注

【戰國策】參見卷四160條。

【灌園記】即《齊世子灌園記》。明張鳳翼撰。南戲傳奇。三十齣。

有明萬曆間金陵富春堂刊本、明末汲古閣原刊本、《六十種曲》本。演戰國時燕國樂毅圖齊，齊潛王被殺，世子田法章埋名姓，為太史敫傭工灌園，後田單破燕師，迎田法章為王，納太史敫之女太史君王后為妃事。

【馮猶龍刪改正之】此指《新灌園》。明張鳳翼撰，明馮夢龍更定。

南戲傳奇。三十六齣。有明墨憨齋刊本、乾隆間鐵瓶書屋印本。參見「灌園記」注。

戲曲用語注

【角色】即古典戲曲中人物之類型。

通釈

『戰國策』にいう。

齊軍は敗れ、淖齒は潛王を鼓里で殺した。太子はそこで身なりを変え、太史敫の家に逃れ、園丁となった。（後の襄王の）妃は太史氏の娘だが、園丁を貴人と察し、よく彼に仕えた。田單が齊の国を取り戻し、さっそく莒から太子を迎えて、王位につけ、君王后を妃につけた。

『史記』「田敬仲世家」にいう。

燕の將軍樂毅が臨淄に出て、潛王は国外へ亡命し、衛の国に赴いた。衛の君主は御殿を空けて潛王の宿所とし、臣と称してもてなした。潛王は傲慢だったので、衛の重臣た

ちは彼を侮った。潛王はそこを去って、鄒と魯の国に向かったが、やはり傲慢だったので、鄒と魯の君主は彼を国に入れなかった。そこで、莒の城に向かった。楚では淖齒に命じ、兵を率いて齊を救わせた。（淖齒は）そこで潛王を殺害し、燕（の將）と齊の攻略した土地を分け合った。潛王が殺害されると、その子の法章は姓名を変え、莒の太史敫の雇い人になった。太史敫の娘は法章の容貌が優れているので、常人ではないと思ひ、憐れに思つて彼に衣服や食事をひそかに与えているうち、二人はいい仲となった。襄王は即位すると、太史氏の娘を后に立てた。太史敫は「娘は仲人を立てないで、かつてに嫁に行つた。私の娘だとは思わぬ。わが家名を傷つけた。」と言ひ、死ぬまで君王后に会わなかった。君王后は賢明な人で、親が会つてくれないからといって、人の子としての礼儀を失うことはなかった。張鳳翼はすべてこれらの記載に基づいて『灌園記』伝奇を作つた。馮夢竜は『灌園記』伝奇を書き改めたが、その序にいう。

『灌園記』のように奇な物語には、伝がなくてはならない。ただ私が思うに、現在伝わっている『灌園記』のような伝奇は、（後世に）伝わらないものと思はれるが、伝わらなくなつてしまふのも残念である。法章は亡国の後、父が他人の手で殺され、自らは奴僕の身となった。これぞまさしく、孝子が一朝事あるに備え、志士が臥薪嘗胆する日々であるといえよう。（法章は）悲憤慷慨せず、ひたすら一婦人を得ようとしたが、若くして志のあるものであれば、そのようにはしないはずだ。さらに五・六年間、消息を絶つた後、

にわかに即位したが、父の仇を討っておらず、父の遺骸も取り戻していないのに、その事をなおざりにして、懇切に娘をもらおうと太傅に尋ねるのも、志があるといえようか。君王后はたぐいまれなる女侠であるのに、一・二度会ったのみで貞操を失った、即ち史書にいうところの「密かに私通する」であるが、言うほど簡単なことではない。王孫賈母子は忠義な人物で、潛王のために一生の恨みを晴らしたが、それを取り上げていない。そうであるならば、園丁をし、勝手に結婚したに過ぎなくなってしまう。園丁にせよ、勝手な結婚にせよ、奇とするに足りないし、伝える価値もない。張鳳翼は「息子が崑山へ試験を受けに行くのに私は付き添った。船中何もすることが無く、そそくさと書いたので、詳しく吟味する時間がなかった」といつているが、まったくもってその通りである。私が手を加えたことで、忠・孝・志・節などが備わり、ようやく教化の意味を持ち、伝えるべき奇が備わった。

馮氏のこの言葉は、ずばり伝奇のあり方を述べたもので、ここに書き留めた。ただ、太史敷は潔癖と言うべき人物であるため、「迎后登車」の幕では、君王后と母との別れの場面で、太史敷が（娘の君王后に）会おうとせず、「やむなく頑固な家長に遠くから挨拶する。愚かな娘をお許しください」と（君王后に）唱わしている。

訳注

【鼓里】現在の山東省日照市莒県の近辺。

【臨淄】現在の山東省淄博市。

【莒】現在の山東省日照市莒県。

【太傅】国王を輔佐する大臣。

【崑山】原文「玉峰」。現在の江蘇省崑山市にある山の名で、ここでは崑山の別称として使われている。

（永上）

198 《知新録》二云：「元曲有呂布、貂蟬及奪戟爭鬪

事。按：《呂布傳》言：『布小失意，卓拔手戟擲布。布拳捷，避之。』又言：『布與卓侍婢私通，恐事發覺，心不自安。布因朝會，手刃刺卓。』想侍婢當即貂蟬也。元曲所云必有所據。」

校注

【知新録】此條見於卷二十三（貂蟬）。

【呂布傳】即《三國志》卷七（呂布傳）。

【布小失意】《三國志》「布」下有「便弓馬，膂力過人，號為飛將。稍遷至中郎將，封都亭侯。卓自以遇人無禮，恐人謀已，行失常以布自衛。然卓性剛而褊，忿不思難，嘗」五十字。

【卓拔手戟擲布】《三國志》無「卓」字。

【布因朝會】《三國志》作「先是，司徒王允以布州里壯健，厚接納之。後布詣允，陳卓幾見殺狀。時允與僕射士孫瑞密謀誅卓，是以告布使為內應。布曰：『奈如父子何。』允曰：『君自姓呂，本非骨肉。今憂死不暇，何謂父子。』布遂許之。」。

【布拳捷】《讀曲叢刊》本「拳」作「奉」。今據稿本、《三國志》、

《知新錄》等改。

人名注

【呂布】漢五原郡九原人。字奉先。初事丁原，繼事董卓。與王允共殺董卓，授奮威將軍。後據濮陽、下邳，為曹操所敗。

《三國志》卷七、《後漢書》卷七十五有傳。

【貂蟬】三國故事中人物。有國色天香之貌，為呂布之妻。

【卓】即漢董卓。參見卷二07條。

書名・作品名注

【知新錄】參見引用書目。

【元曲】此當指《美人計》。元無名氏撰。北雜劇。全名《錦雲堂美女連環記》。有息機子本、《元曲選》本。演漢王允、蔡邕設美女連環計，唆呂布刺殺董卓事。

【呂布傳】即《三國志》卷七〈呂布傳〉。《三國志》，晉陳壽撰。二十四史之一。

通釈

『知新錄』にいう。

元曲には呂布と貂蟬の物語、および（董卓が）戟を奪つて（呂布と）争う話を扱ったものがある。考えるに、『三國志』『呂布伝』にいう。「少しばかり気に入らないことがあったので、董卓は手戟を抜いて呂布に投げつけた。呂布はすばやく手で払いのけてかわした。」またいう。「呂布は董卓の下女と密通していたので、露見を恐れ、心中穏やかでなかった。呂布は謁見の際、武器を手にして董卓を刺した。」思うに、この下女が貂蟬だろう。元曲で描かれていることには必ず基づくところがある。

訳注

【手戟】手に持って投げる、小型の戟。

（山下）

199 「呂翁祠在邯鄲縣北二十里黃梁店。李長沙詩云：『舉世空中夢一場，功名無地不黃梁。馮君莫向癡人說，說與癡人夢轉長。』端溪王崇慶詩云：『曾聞世有盧生夢，只恐人傳夢未真。一笑乾坤終有歇，呂翁亦是夢中人。』乃元人馬致遠《黃梁夢》雜劇，為鍾離度呂洞賓事，夢中呂作元帥，征吳元濟，則憲宗時事矣。湯若士本之作《邯鄲夢》，則為呂度盧生，而為開元時事。按：「呂洞賓，關右人，唐咸通中舉進士不第，值巢賊為梗，攜家隱終南山。」《錦繡萬花谷》引此，言出見《雅言雜載》，則憲宗時已非，開元時尤非。《真仙通鑑》有盧生事，恐未然耳。

校注

【呂翁祠】此文見於清王棠《知新錄》卷三十〈呂翁夢〉。明朱國禎《涌幢小品》卷二十三〈呂翁夢〉、清褚人獲《堅瓠五集》卷一〈呂翁夢〉等亦錄此事。

【李長沙詩】此詩見於《懷麓堂詩話》第八葉。《懷麓堂詩話》，又名《麓堂詩話》。明李東陽撰。一卷。廣收古今詩話。有《知不足齋叢書》本。

【舉世空中夢一場】《懷麓堂詩話》、「中」作「驚」。

【馮君莫向癡人說】《懷麓堂詩話》、《堅瓠五集》、「馮」作「憑」。

【端溪王崇慶詩】未見《端溪先生集》，待考。

【呂洞賓關右人】此文見於《錦繡萬花谷》前集卷三十。

【攜家隱終南山】《錦繡萬花谷》下有「絕世辟穀，變易形體，尤精劍術。見《雅言雜載》」十九字。

【真仙通鑑】見卷四十四（盧生）。

人名注

【呂翁】即唐呂洞賓。參見卷四187條「呂岩」注。

【李長沙】即明李東陽。字賓之，號西涯，謚文正。湖南長沙茶陵人。天順八（1464）年進士，官至禮部尚書兼文淵閣大學士。

茶陵詩派領袖。著有《通鑑纂要》、《大明會典》、《孝宗實錄》、《懷麓堂集》等。《明史》卷一百八十一有傳。

【端溪王崇慶】字德徵，號端溪。明河南開州人。正德三（1508）年進士，官至禮部尚書。著有《周易議卦》、《五經心義》、《山海經釋義》、《元城語錄解》、《海樵子》、《南京戶部志》、《開州志》、《端溪先生集》等。

【盧生】參見卷三136條。

【馬致遠】參見卷一033條「馬東籬」注。

【鍾離】即漢鍾離權。字雲房，號正陽子，又號和谷子。道家稱陝西咸陽人，初任諫議大夫，官至大將軍，後入終南山修道。為八仙之一。

【吳元濟】唐河北滄州清池人。蔡州節度使吳少陽之子。元和九（814）年舉兵，占河南。元和十二（817）年兵敗，斬於長安。《舊唐書》卷一百四十五有傳。

【憲宗】即唐憲宗。

【湯若士】參見卷二070條。

【巢賊】即唐黃巢。參見卷四189條。

書名・作品名注

【黃梁夢】參見卷二082條。

【邯鄲夢】參見卷二086條。

【錦繡萬花谷】參見卷首引用書目。

【雅言雜載】宋王舉撰。佚。

【真仙通鑑】即《歷世真仙體道通鑑》。明趙道一撰。正編五十三卷、續編五卷、後集六卷。匯集軒轅黃帝至元代神仙道士之傳記。有《正統道藏》本。

通釈

呂翁祠は、邯鄲県の北二十里、黄梁店にある。李東陽の詩にいう。世を挙げ空しき中の夢一場、功名地として黄梁ならざるは無し。君に憑り癡人に向ひて説く莫かれ、癡人と説かば夢転た長し。（この世はすべて空しい一場の夢。いかに功名を挙げようとも、どんな地位も黄梁の夢でないものは無い。痴れ者に自慢話をしてはいけないよ。痴れ者と話したところで夢が長くなるだけだ。）

王崇慶の詩にいう。

曾て聞く世に盧生の夢有りと、只だ恐る人伝ふ夢未だ真ならざるを。乾坤を一笑し終ひに歇有り、呂翁も亦た是れ夢中の人。（世に盧生の夢という話があると聞いたことがあるが、ただ恐れているのは人々が話し伝えるその夢も、本当ではないということだ。世界にも終わりはあるのだと一笑すべきで、夢だと言った呂洞賓もまた、夢の中の人なのだ。）

校注

【鄭廷玉】《劇説》諸本「廷」均作「庭」，今據《錄鬼簿》等改。

人名注

【鄭廷玉】元河南彰德人。字諱生平未詳，待考。著有《冤家債主》、《後庭花》、《疏者下船》、《忍字記》、《金鳳釵》等雜劇。

【沈寧菴】即明沈璟。參見卷一 034 條。

書名・作品名注

【後庭花】元鄭廷玉撰。北雜劇。全名《包待制智勘後庭花》。有脈望館《古名家雜劇》本、《元曲選》本。演宋妓女王翠鸞被殺，其鬼託書生劉天儀告狀，包拯斷案事。

【桃符】即《桃符記》。參見卷四 163 條。

戲曲用語注

【本色】參見卷三 137 條。

【排場】古代曲論中，泛指故事角色、唱腔、念詞等結構佈置。

【賓白】即念白。韻白與散白之合稱。

通釈

鄭廷玉作の『後庭花』雜劇は、実演向けである点では他の追隨を許さない。沈璟がこれをもとに『桃符記』を作ったが、舞台構成・台詞まわし・組み立てなど、いずれも鄭廷玉に遠く及ばない。

(山下)

これはすなわち元の馬致遠の『黄梁夢』雜劇で、漢鍾離が呂洞

賓を悟らせる故事である。夢の中で呂洞賓が元帥となるが、吳元済を征討したと言っているからには、唐の憲宗の時(806～820)のことである。湯顯祖はこれをもとに『邯鄲夢』を作ったが、そこでは呂洞賓が盧生を悟らせる話になっており、しかも唐の開元年間(713～741)のこととしている。考えるに、

呂洞賓は関右の人で、唐の咸通年間(860～874)に科挙を受けたが合格しなかった。黄巢の乱が猖獗を極めていたので、家族を連れて終南山に隠れ住んだ。

『錦繡万花谷』はこの文を引用して、『雅言雜載』が出典だとしている。そうであるならば唐の憲宗の時ということにはならない上に、開元年間というのはなおさらあり得ない。『歷世真仙体道通鑑』に載せる盧生の話は、これも恐らく事実ではないだろう。

訳注

【呂翁祠】現在の河北省邯鄲市邯鄲県黄梁夢鎮にあり、呂仙祠と称される。

【関右】潼関より西の地域を指す。

【終南山】陝西省西安の南東にある山。

【盧生の事】『歷世真仙体道通鑑』は、盧生を唐の敬宗の宝暦年間(825～827)の炭売りとし、呂洞賓とは関わっていない。

(山下)

200

鄭廷玉作『後庭花』雜劇，只是本色處不可及。沈寧菴演為『桃符』，排場、賓白、用意，遜鄭遠矣。

201

宮大用『范張雞黍』第一折，乃一篇經史道德大論，抵多少宋人語錄。曲中用「隨邪」二字，乃玉茗所本。

校注

【隨邪】此語見於元宮大用《范張雞黍》雜劇第二折（三煞）：

「他從來正性不隨邪，凜凜英雄，神道般剛明猛烈。」

【玉茗所本】明湯顯祖《牡丹亭還魂記》傳奇第三十二齣（尾聲）：「一點心憐念妾，不著俺黃泉恨你，你只罵的俺二句鬼隨邪。」

人名注

【宮大用】參見卷一 036 條。

【玉茗】即明湯顯祖。參見卷二 070 條。

書名・作品名注

【范張雞黍】參見卷一 036 條。

通釈

宮大用の『范張雞黍』雜劇の第一折は、經史の學と道德についての堂々たる論説であり、宋人の語録に勝るものである。作中に「隨邪」の二文字を用いているが、湯顯祖はこれにもとづいて（牡丹亭還魂記）伝奇第三十二齣（尾聲）に「隨邪」という言葉を用いている。

訳注

【宋人の語録】『朱子語類』など、宋代に作られた口語体で學説を記した書物を指す。

（川）

202 《西河詞話》云：「宋孫明復髫髻白，李文定請以

弟之女妻之，孫曰：『相女不以嫁公侯，乃以嫁山谷衰老，古無有之。』其曰『相女』者，相門之女，正以李復古曾為相故也。《西廂》末劇有

『自古相女配夫』，世多不解，烏知實本諸此。」

又云：「《西廂》久為人更竄。予求其原本正之，逐字核實，其書頗行。其中尚有不能詳處，如第四折內有『和尚們回施些幽期密約』句，予向所釋，但曰：『施僧曰「布施」，反乞僧施曰「回施」。』後友人有論及者，堅謂『回』作『曲』解，是『委曲周旋』意，雜引『回』、『曲』二字作證。曾記《北史》：『北齊李庶無鬚，人謂天閹，崔謚嘗戲庶曰：「教弟種鬚法：取錐刺面為竅，而插以馬尾，當效。」是時崔族多惡疾，庶因答曰：「請先以方回施貴族，藝眉有效，然後種鬚。」然則『回施』，『反施』矣。蔡子伯曰：『施，音賜。今俗稱「回賜」者，即「回施」之謂。』尤較直捷。」

校注

【西河詞話】稿本上有「毛」字。此文見於《西河詞話》卷一（相女配夫）。

【宋孫明復】按：從此至「古無有之」，《西河詞話》引《漚水燕談錄》卷二（孫明復先生）。

【自古相女配夫】此句見於《西廂記》第五本第四折（太平令）。

按：《毛西河論定西廂記》注：「相女、配夫，各二字成句。詞隱生云：相女配夫蓋成語。相猶視也。視其女而配夫，言佳人必配才子也。」

【又云】此文見於《西河詞話》卷一（回施）。

【逐字核實】《西河詞話》「核」作「覈」。

【原本】按：《毛西河論定西廂記》卷首〈論定西廂記自序〉：

「舊時得古本《西廂記》，為元末明初所刻。」毛奇齡所據古本，今不知所歸。待考。

【和尚們】此句見於《毛西河論定西廂記》第一本第四折（沉醉東風）：「只願梅香休劣，夫人休焦，犬兒休惡。和尚每回施些幽期密約。」《西廂記》諸本中，《古本西廂記》、《毛西河論定西廂記》等作「回施些」，《新刊奇妙全相註釋西廂記》等作「早成就了」。

【但曰】按：《毛西河論定西廂記》第一本第四折注：「回施者，主人醺畢謝僧，僧亦懺福回答。此俗至今相沿。張生所欲者幽期密約耳。故以此祈和尚每也。俗本不知，添一佛字，謬甚。」

【北史】此文見於《北史》卷四十三〈李庶傳〉。

【北齊李庶】《北史》無「北齊李」三字，上有「岳弟」二字，下有「方雅好學，甚有家風。歷位尚書郎、司徒掾，以清辯知名。常攝賓司，接對梁客，梁客徐陵深歎美焉」三十七字。

【無鬚人調天闥】《北史》無「無鬚人調」字，上有「庶生而」三字。

【嘗戲庶】《北史》作「調之」。

【種鬚法】《北史》無「法」字。

【取錐刺面為竅】《北史》「取」作「以」，「竅」作「孔」。

【而插以馬尾當效】《北史》無「而」字，亦無「當效」二字。

【是時崔族多惡疾】《北史》無此七字。

【庶因答曰】《北史》無「因答」二字。

【請先以方】《北史》無「請」字，「方」上有「此」字。

【然後種鬚】《北史》「種」作「樹」，《西河詞話》下有「蓋惡疾是癩疾，以癩者無眉，故云也」十四字。

【蔡子伯】此文不知所據，待考。

【尤較直捷】《西河詞話》下有「但釋古須有據耳」七字。

人名注

【孫明復】即宋孫復。字明復，號富春，世稱泰山先生。晉州平陽人。淳化、嘉祐間在世。屢試不第，擢為秘書省校書郎。官至殿中丞。著有《周易口義》、《春秋尊王發微》、《睢陽子集》等。《宋史》卷四百三十二有傳。

【李文定】即宋李迪。濮州鄆城人。字復古，諡文定。景德二（1005）年狀元。官至同中書門下平章事。《宋史》卷三百一十有傳。

【李復古】即宋李迪。參見「李文定」注。

【後友人有論及者】按：此友人不知何人，待考。

【李庶】北齊頓丘人。官至臨漳縣令。《北史》卷四十三有傳。

【崔諶】北齊博陵人。官至河間太守。

【蔡子伯】即明蔡仲光。原名士京，字大敬，又字子伯。浙江蕭山人。崇禎間諸生，入清不仕。著有《謙齋遺集》。

書名・作品名注

【西河詞話】參見卷首引用書目。

【西廂】即元王實甫《西廂記》。參見卷一051條。

【其書】即《毛西河論定西廂記》。有清康熙十五（1676）年學者堂刊本。

『西河詞話』にいう。

宋の孫復が白髪になったころ、李迪は弟の娘をめとつてほしいと頼んだ。孫復は「相女^{おしょうご}を貴顕の方に嫁がせず、私のような女に引きこもった老いばれに嫁がせるなどとは、古来前例がありません」と言った。ここでいう「相女」というのは、宰相の家の娘のことであり、まさしく李迪が宰相になったことがあったためにこう言ったのである。『西廂記』雜劇第五本第四折「太平令」の「古えより『相女』の結婚は」という句を、世の多くの人が解釈できないのは、実はここに基づいていることを知らないからだ。またいう。

『西廂記』雜劇は、長い間に渡り人々の手により書き換えられてきた。私はその原本を探し求めて校正し、一字ごとに確かめ、その本（『毛西河論定西廂記』）は広く読まれた。しかしその本でもまだ解明できていないところがあった。たとえば第一本第四折「沈醉東風」の「お坊様がた、布施のお返しにどうか逢引きを『回施』して下さいませ」という句は、私の先の解釈では、ただ以下のように述べただけである。「僧に施すことを『布施』といい、逆に僧に施しを乞うことを『回施』という。」その後、ある友人がこれについて論じて、「回」は「曲」に通じると解釈すべきで、「こまこまと世話をしてやる」という意味だと主張し、「回」と「曲」の二字の用例をこまこまと挙げて論拠とした。記憶によれば、『北史』の李庶伝には以下のように見える。「北

齊の李庶にはひげが無く、人々は天然の宦官と呼んでいた。崔謹は以前李庶をからかってこう言った。『君にひげの植え方を教えてやろう。雖で顔に穴をあけ、馬の尾の毛を挿しこんだら、きつと効果てきめんだろう。』この時崔謹の一族には、らい病を病むものが多かったので、李庶はこう答えた。『まずはその処方をも、ご一族に「回施」され、眉を植えてみて効果があったら、私もひげを植えましょう。』そうであるなら、「回施」は「逆にほどこす」ということになる。蔡仲光は「施の音は賜である。いま俗に『回賜』（返礼として賜る）というのが、つまり『回施』のことである」と言うが、こちらのほうがすっきりしている。

（川）

203

喬夢符《兩世姻緣》曲中云：「俺主人酒盃賺煞春風凹。」從唐人「酒凹疊心翻」出。

校注

【俺主人酒盃賺煞春風凹】此句見於元喬夢符《兩世姻緣》第三折「小桃紅」，「賺煞」作「嫌殺」。

【酒凹疊心翻】此句不見於《全唐詩》，待考。

人名注

【喬夢符】即元喬吉。參見卷一048條。

書名・作品名注

【兩世姻緣】參見卷二082條。

通釈

喬吉の『兩世姻緣』雜劇の（第三折「小桃紅」）曲にある「（こ主人様は酒杯を春風に干されたままにするのがおさらい）」という句は、唐代の作家の「酒凹みて疊心翻る（さかずきの酒が空になると（酒をくむので）酒樽の水面に波が立つ）」の句を出典とする。

（川）

204 《程史》云：「秦檜以紹興十五年四月丙子朔賜

第望仙橋，丁丑賜銀絹萬匹、兩，錢千萬，綵千縑。有詔就第賜宴，假以教坊優伶，宰執咸與。中席，優長誦致語退，有參軍者前，褒檜功德。一伶以荷葉交椅從之。詠語雜至。賓歡既洽，參軍方拱揖謝，將就倚，忽墜其幞頭，乃總髮為髻，如行伍之巾，後有大巾環為雙疊勝。伶指而問曰：『此何環。』曰：『一勝環。』遽以朴擊其首曰：『爾但坐太師交椅，取銀絹例物，此環掉腦後可也。』一座失色。檜怒，明日下伶於獄，有死者。」又云：「胡給事既新貢院，嗣歲庚子，適大比，乃侈其事，命供帳考校者悉倍前規：鵠袍入試，茗卒饋漿，公庖繼肉，坐案寬潔。執事恪敬，閭閻于于，以鬯於文，士論大愜。會初場賦題，出《孟子》：『舜聞善若決江河』，而以『聞善而行沛然莫禦』為韻。士既就案矣，蜀俗敬長而尚先達，每在廣場，不廢請益焉。晡後，忽一老儒摘《禮部韻》示諸生，謂：『沛字

惟十四泰有之，一為「顛沛」，一為「沛邑」，注無「沛決」之義。惟它有「霈」字，乃從「雨」，為可疑。』眾曰：『是』，闕然叩簾請。出題者偶假寐，有少年出酬之，漫不經意，宣云：『《禮部韻》注義既非，增一雨頭無害也。』揖而退，如言以登於卷。坐遠於簾者，或不聞知，乃仍用前字，於是試者用『霈』『沛』各半。明日將試論，語籍籍傳，凡用沛字者皆窘，復扣簾。出題者初不知昨日之對，應曰：『如字。』廷中大譁，浸不可制，譟而入曰：『試官誤我三年，利害不細。』簾前闌木如拱，皆折。或入於房，執考校者一人毆之，考校者惶遽，急曰：『有雨頭也得，無雨頭也得。』或又咎其誤，曰：『第二場更不敢也。』蓋一時祈脫之詞。移時稍定，試司申：『鼓譟場屋，胡以不稱於禮遇也。』怒，物色為首者盡繫獄。韋布益不平。既折號，例宴主司以勞還。畢三爵，優伶序進。有儒服立於前者，一人旁揖之，相與詫博洽，辯古今，岸然不相下，因各求挑試所誦憶。其一問：『漢四百載，名宰相凡幾。』儒服以蕭、曹而下枚數之，無遺。群優咸贊其能。乃曰：『漢相吾能言之矣，敢問唐三百載名將帥何人也。』旁揖者亦詘指英、衛以及季葉，曰：『張巡、許遠、田萬春。』儒服奮起爭曰：『巡、遠，是也。萬春姓雷，攷史牒未有以雷為田者。』揖者不服，撐拒膝口。俄一綠

衣參軍自稱教授，前據几。二人敬質疑，曰：『是故雷姓。』揖者大詬，袒褐奮拳。教授遽作恐懼狀，曰：『有兩頭也得，無兩頭也得。』坐中方失色，知其風已也。忽優有黃衣者，持令旗躍出稠人中，曰：『制置太學給事台旨：試在坐，爾輩安得無禮。』群優亟斂容趨下，喏曰：『第二場更不敢也。』俠所皆笑。席客大慙，明日遁去。遂釋繫者。胡意其郡士所使，錄優而詰之，杖而出諸境。然其語盛傳迄今。」

校注

【程史云】此文見於《程史》卷七〈優伶詠語〉。

【有詔就第賜宴】《程史》「宴」作「燕」。

【後有大巾環】《程史》「環」作「鐙」。

【此何環】《程史》「環」作「鐙」。

【二勝環】《程史》「環」作「鐙」。

【此環掉腦後可也】《程史》「環」作「鐙」。

【一座失色】《程史》「座」作「坐」。

【又云】此文見於《程史》卷十〈萬春伶語〉。

【忽一老儒摘禮部韻示諸生】《程史》「摘」作「擿」。

【闕然叩簾請】《程史》「叩」作「扣」。

【坐遠於簾者】《程史》「於」作「于」。

【明日將試論，語籍籍傳】《程史》「論」下不斷句，而「語」下斷句。

【不知昨日之對】《程史》「日」作「夕」。

人名注

【廷中大譁】《程史》「譁」作「誼」。

【或入於房】《程史》「於」作「于」。

【胡以不稱於禮遇也】《程史》「於」作「于」。

【萬春姓雷】《程史》「春」下有「之」字。

【攷史牒】《程史》上有「歷」字。

【試在坐】《程史》「試」下有「官」字。

【俠所皆笑】《程史》「所」作「所」。

【此何環】《程史》「環」作「鐙」。

【秦檜】參見卷一06條「秦師垣」注。

【胡給事】即宋胡元質。字長文。江蘇長洲人。紹興八（1138）年進士。官至敷文閣大學士。著有《西漢字類》、《春秋左傳摘

奇》等。

【蕭】即漢蕭何。沛人。初為沛主吏掾，後輔高祖之定天下，官至相國。《史記》卷五十四、《漢書》卷三十九有傳。

【曹】即漢曹參。沛人。輔高祖之定天下，官至相國。《史記》卷五十四、《漢書》卷三十九有傳。

【英】即唐李勣。參見卷一045條「徐茂公」注。

【衛】即唐李靖。參見卷二051條「李衛公」注。

【張巡】唐河南南陽人。開元二十九（741）年進士。為真源縣令。

安祿山作亂，起兵討賊，據雍丘、睢陽拒賊軍經年，破城被俘，不屈被殺。贈揚州大都督。《舊唐書》卷一百八十七下、

《新唐書》卷一百九十二有傳。

【許遠】唐杭州鹽官人。曾祖為許敬宗。安祿山反，拜為睢陽太守，與張巡拒賊經年，破城被俘，不屈而死。《舊唐書》卷

一百八十七下、《新唐書》卷一百九十二有傳。

【萬春】即唐雷萬春。為張巡偏將。彊毅用命，每戰張巡任之。

《新唐書》卷一百九十二有傳。

書名・作品名注

【程史】參見卷首引用書目。

【孟子】戰國孟軻撰。儒家《十三經》之一。

【禮部韻】即《禮部韻略》。宋丁度等奉勅撰。五卷。為禮部科舉

應試者，示聲韻之要略。

戲曲用語注

【教坊】參見卷一016條。

【優長】當指教坊優伶之長。

【致語】宋時做戲之前，一人先上場致詞，謂之致語。

【參軍】參見卷一005條。

通釈

『程史』にいう。

秦檜は紹興十五⁽¹¹⁴⁵⁾年四月一日に望仙橋に邸宅を賜り、二日に銀を一万両、絹を一万匹、錢を一千万、綾絹を千反賜った。詔勅により屋敷での宴会を賜り、教坊の役者が貸し与えられ、大臣たちもみな出席した。宴たけなわ、座長が開幕の挨拶を朗唱して退くと、ある参軍が進み出て、秦檜の業績と人徳を褒め称えた。一人の役者が首もたれ付きの床几を持ってこれに従った。諧謔の言葉が飛び交い、賓客が喜び和んだところで、参軍がようやく拱手してお辞儀し、椅子に座ろうとしたが、はたと頭巾を落とした。すると、総髪をわけに結い、あたかも兵士の頭巾のようであった。

かみかさり

頭巾の後ろには大きな環を取り付け、二つ重ねて勝としていた。役者が指さして尋ねた。「これは何という環か。」答えて「二勝環だ。」すぐさまその頭をどついて言った。「おまえは太師椅に座って、銀・絹などを受け取りながら、この環を後に放っておくとは何事か。」満座、色を失った。秦檜は怒って、翌日、役者を投獄し、死者も出た。

またいう。

胡元質が（成都の新たな）貢院を落成させると、その翌年は庚子（淳熙七⁽¹¹⁸⁰⁾）年で、ちょうど科挙の年にあたっていたため、その事業を豪奢にしようとして、飲食や試験の係官を以前の規定の倍に増やさせた。白い上着の受験生たちが貢院に入ると、お茶係の兵卒が飲み物を出し、役所の料理人が肉を送り届け、座席・机は広々として清潔だった。係官は恭しく、穏やかに和み、思うさまに文を書くことができることから、大いに受験生の好評を博した。折しも一日目の試験の賦では、『孟子』の「舜の善を聞くや江河の決するが若し」から出題し、「善を聞きて行うに沛然として響る莫し」を韻とした。受験生は答案にとりかかった。四川の習慣では年長者や先達を尊重し、人が多くいるときには、教えを請うことを怠らないのが常であった。日が暮れてから、突如一人の老受験生が『礼部韻略』を受験生たちに示しながら言った。『沛』の字は十四泰（の韻目）にしか収められていないが、一つが『顛沛』、一つが『沛邑』で、注に『沛決』という意味は見えない。それは『霈』の字の所にしか見えないので、『雨』冠を付けるべきではない

か。」人々は「その通りだ。」騒然として御簾を叩いて尋ねた。出題者がたまたま仮眠を取っていたので、若者が出てきて受け答えたが、あまり注意もせずに、ただ『「礼部韻略」の注と意味が違っているというのであれば、雨冠を増やしても問題無いでしょう」とだけ言い、お辞儀をして退いた。その言葉の通りに答案を書いたが、御簾から遠くに座っていた者には、聞こえずに前の字のままで答えた者もいたため、受験生は「霽」を用いたもの、「沛」を用いたものが相半ばしていた。翌日、論の試験を前にして、しきりに噂が流れ、「沛」の字を用いたものは皆、不合格であるというので、(受験生どもは)また御簾を叩いた。出題者は初め昨日の応対について知らなかったため、「字の通りだ」と答えたので、試験場内は騒然としますます收拾がつかなくなり、(受験生どもは)怒鳴りながら(御簾の内に)押し入って「試験官のお陰で三年を棒に振った。大損害だ」と言った。御簾の前の小門は木材がさしかかるようになっていたが、みな折れてしまった。ある者が部屋の中に入って、試験官の一人を捕まえて殴りつけたので、試験の係官は恐れおののき、慌てて「雨冠があってもよいし、雨冠が無くてもよい」と言った。ある者が更にその誤りを咎めると、「次の科目では決してこのようなことがないようにします」と言った。おそらく一時の言い逃れだったのであるう。しばらくしてやや落ち着いてきたところで、試験の責任役は「試験場で騒動を起こすとは、礼遇に値しようか」と説諭し、怒って先頭に立っていたものどもを探しだし、ことごとく投獄した。このため受験生どもはますます不満を募らせた。合格者の発表が終わると、恒例によって長官をねぎらい饗別する宴会が開かれた。三度の乾杯が終わると、役者がしづしづと進み出た。受験生(に扮したもの)が前に立ち、一人が傍らで拱手して、互いに博識を自慢し、古今を弁じ、傲然として譲らなかったもので、それぞれ問題を出し合って暗記していることを誂んじることになった。一問目は「漢の四百年で、名宰相は合わせて幾人か。」受験生は、蕭何・曹参以下、残らず数え上げた。役者たちは皆、その才能を褒め称えた。そこで言った。「私は漢の大臣を言えたぞ。お尋ねするが唐三百年で名将にどのような者がおるか。」傍らで拱手している者も(開国の名将である)李勣・李靖から唐末まで、数え上げて言った。「張巡・許遠・田万春。」受験生は色めき立って突っかった。「張巡・許遠はその通りだが、万春の姓は雷だ。史書をひもとくに雷を田としている例はない。」拱手している者は引き下がらずに抗弁した。にわかには一人の緑衣の参軍が自ら教授と称して、机の前に腰掛けた。二人が答を請うと、「これゆえに雷姓である。」拱手している者は大いに怒り、肌脱ぎになって拳を振り上げた。教授は恐れおののく仕草をして「雨冠があってもよいし、雨冠がなくてもよい。」そこでようやく宴席の一同は色を失った。自分たちを揶揄していることがわかったからである。突然、黄衣の役者が出てきて、指令の旗を手の人々の間に躍り出て言った。「制置太学給事閣下の仰せである。試験官の御前で、汝ら無礼を働いてはな

らぬ。」役者どもは、直ちに居住まいを正して小走りに退きながら、声を揃えて挨拶した。「次の科目では決してこのようなことがないようにします。」階の両側は皆笑った。席上の客人どもは大いに恥じ入り、翌日、逃げるように帰って行った。そして、投獄されていたものたちは釈放された。胡元質は郡の有力者の差し金ではないかと考え、役者を捕まえて訊問し、杖刑の上、所払いとした。しかし、その言葉は今に至るも盛んに伝えられている。

訳注

【望仙橋】現在の浙江省杭州市の望江路の中河に掛かる橋。

【首もたれ付きの床几】原文「荷葉交椅」。荷葉はヘッドレストのこと。交椅は折りたたみ式の椅子。詳しくは次注参照。

【はたと頭巾を落とした】秦檜をからかったもの。国忌の際に秦檜は床几の背にもたれかかって頭巾を落としたことがある。そこで、京尹の呉淵がおもねって首もたれ（荷葉託首）を床几に取り付けさせ、「太師様」と呼ばれ広く使われるようになったことが、南宋の張端義『貴耳録』巻下に見える。肘掛け・背もたれ付きの大型の椅子を「太師椅」と称するのは、ここに起源する。

【双暈勝】後ろに大きな輪を作った髪型の呼称。

【二勝環だ】「二聖還」と同音で、金に抑留された徽宗・欽宗の帰還を図らない秦檜をそしったもの。

【檢討】翰林院檢討の略称。清代、文史の編纂を司る官で、科挙の上位合格者三名が初めに任じられるのが通例であった。

【礼部】科挙は礼部の管轄。

【一日目の試験の賦】南宋の科挙は、詩賦と経義にわかれ、前者は詩賦・論・策の三種を、各一日、合計三日に渡って試験するものであった。

【御簾を叩いて尋ねた】宋代の科挙では、受験生一同に問題が揭示された後、御簾の中に居る試験官に、試験問題に関する疑問点を質問することができた。

【制置太学給事】制置は制置使司の略称。南宋では地方の長官。太学は、朝廷が設置する学校のこと。給事は給事中のこと。文書・政令の審査を司る。ここでは高位の官職名を並べたてている。

（千四）

205 《續筆談》云：「元人《女狀元黃崇嘏春桃記》，今不傳，僅《輟耕錄》有其目，大抵如《琵琶》等記。」

校注

【續筆談】此條見於《丹鉛新錄》卷四（女狀元）。稿本上有「胡應麟」三字。

【元人】《丹鉛新錄》上有「用修之誤，蓋因元人《女狀元春桃記》而誤也」十七字。

【女狀元黃崇嘏春桃記】《丹鉛新錄》無「女狀元黃崇嘏」六字。

【僅輟耕錄有其目】《輟耕錄》卷二十五（院本名目・院么）有《女狀元春桃記》。按：《輟耕錄》所錄者即宋元院本雜劇，與《丹鉛新錄》所引《春桃記》為南戲傳奇迥異。

【大抵如琵琶等記】《丹鉛新錄》「抵」作「概」，「記」作「劇」。

人名注

【黃崇嘏】五代前蜀邛崃人。黃使君之女。居恆為男裝，蜀相周庠薦為司戶參軍。

書名・作品名注

【續筆談】參見卷首引用書目。

【女狀元黃崇嘏春桃記】即《春桃記》。明無名氏撰。南戲傳奇。

見於明楊慎《丹鉛總錄》卷二十一〈女狀元〉。佚。

【輟耕錄】參見卷首引用書目。

【琵琶】即明高明《琵琶記》。參見卷一052條。

通釈

『続筆談』にいう。

元の人の手になる『女狀元黃崇嘏春桃記』は、今では失われている。わずかに『輟耕錄』がその題目を載せているだけである。恐らくは『琵琶記』などのような芝居だったのであろう。

(永上)

206 《詩辨砥》云：「《北西廂》古本，陳實菴點定者

為佳。別本多所改竄。如『東閣玳筵開』為『帶

烟開』，『馬兒連連行』為『逆逆行』，穿鑿可笑。

『請字兒不曾出聲，去字兒連忙答應』。或謂：

『請未出聲，如何答應』，改作『請字兒方才出

聲』，索然無味矣。『梵王宮殿夜撞鐘』，撞，平

聲，田水月改作『聲鐘』。『聲鐘』是何等語。」

校注

【詩辨砥】此條見於卷四〈詞曲〉。此所引乃節略，一一不舉其異同。

【東閣玳筵開】此句見於《西廂記》第二本第三折〈醉春風〉。

【帶烟開】《詩辨砥》「開」作「者」。此字句見於朱石津刻《古本西廂記》。

【馬兒連連行】此句見於《西廂記》第四本第三折〈滾繡球〉。

【逆逆行】此句見於《新刊大字魁本全相參增奇妙註釋西廂記》。

【請字兒不曾出聲去字兒連忙答應】此句見於《西廂記》第二本第三折〈上小樓〉。

【請字兒方才出聲】按：《西廂記》諸本中未見作如此者，待考。

【梵王宮殿夜撞鐘】此句見於《西廂記》第二本第四折〈調笑令〉。

人名注

【陳實菴】即明陳于鼎。江蘇宜興人。崇禎元（1608）年進士。官至翰林編修。入清後不仕。

【田水月】即明徐渭。參見卷二082條「徐田池」注。

書名・作品名注

【詩辨砥】應作《詩辨砥》。參見卷首引用書目。

【北西廂】即元王實甫《西廂記》雜劇。參見卷一051條。今據上海

古籍出版社王季思校訂排印本。「陳實菴點定」本，佚。「田

水月改」本，即明萬曆間王起侯刻《田水月山房北西廂藏

本》，中國國家圖書館、南京圖書館所藏，未見。

通釈

『詩弁砥』にいう。

『西廂記』の古い版本では、陳于鼎の手直したものが

優れている。これ以外の版本の多くは字句をいい加減に改めたものだ。たとえば「東の高殿で玳筵が開かれる」の「玳筵」を「帶煙たひくすみが開く」とし、「馬は逆逆歩さかざりむ」を「逆逆歩さかざりむ」と改めるのは、こじつけにもほどがある。「どうぞの言葉も言わないうちに、伺いますと慌てて答える」という台詞を、ある人は言葉の出ないうちに、どうして答えられるだろうかと考えて「どうぞの言葉が出るやいなや」と改めているが、興ざめも甚だしい。「梵王の宮に小夜ふけて、撞く鐘か」の、「撞」は平声なのに、徐渭は「声する鐘か」に改めている。「声する鐘」とは何という言葉であらうか。

(永上)

207

「《詞旨》載《西廂》警策不下百十條，如『竹索纜浮橋』、『檀口搵香腮』等語，不知皆撰自《董解元西廂》。『竹索』上有『寸金』二字，『檀口』句則曰：『檀口微微，笑吐丁香舌，被郎輕嚙，卻更增人劣』。較漢卿奇麗、精采十倍。」見黃嘉惠《董解元西廂記》序。案：王實甫《長亭送別》一折，稱絕調矣。董解元云：「莫道男兒心如鐵，君不見滿川紅葉，盡是離人眼中血。」實甫則云：「曉來誰染霜林醉。總是離人淚。」「淚」與「霜林」，不及「血」字之貫矣。又董云：「且休上馬，若無多淚與君垂，此條情緒你爭知。」王云：「閣淚汪汪不敢垂，恐

怕人知。」董云：「馬兒登程，坐車兒歸舍，馬兒往西行，坐車兒往東拽，兩口兒一步兒離得遠如一步也。」王云：「車兒投東，馬兒向西，兩處徘徊，落日山橫翠。」董云：「我郎休怪強牽衣，問你西行幾日歸。著路裏小心呵，且須在意。省可裏晚眠早起，冷茶飯莫吃，好將息。我專倚著門兒專望你。」王云：「到京師服水土，趁程途，節飲食，順時自保揣身體。荒村雨露宜眠早，野店風霜要起遲。鞍馬秋風裏，最難調護，須要扶持。」董云：「驢鞭半裊，吟肩雙聳。休問離愁輕重，向個馬兒上馳也馳不動。」王云：「四圍山色中，一鞭殘照裏。人間煩惱填胸臆，量這大小車兒如何載得起。」董云：「帝里酒釀花濃，萬般景媚，休取次共別人便學連理。少飲酒，省遊戲。記取奴言語，必登高第。妾守空閨，把門兒緊閉，不拈絲管，罷了梳洗。你咱是必把音書頻寄。」王云：「你休憂文齊福不齊，我只怕停妻再娶妻。一春魚雁無消息，我這裏青鸞有信頻宜寄，你切莫金榜無名誓不歸。君須記，若見異鄉花艸，再休似此處棲遲。」董云：「一個止不定長吁，一個頓不開眉黛。兩邊的心緒，一樣的愁懷。」王云：「他在那壁，我在这壁，一遞一聲長吁氣。」兩相參玩，王之遜董遠矣。若董之寫景語，有云：「聽塞鴻，啞啞的飛過暮雲重」，有云：「回首孤城，依約青山擁」，有云：

「柳堤兒上把瘦馬兒連忙解」，有云：「一徑入天涯，荒涼古岸，衰艸帶霜滑」，有云：「駝腰的柳樹上有漁槎，一竿風旆茅簷上掛，澹烟消洒，橫鎖著兩三家」，有云：「浙零零地雨打芭蕉葉，急煎煎的促織兒聲相接」，有云：「燈兒一點，甫能吹滅，雨兒歇，閃出昏慘慘的半牕月」，有云：「披衣獨步在月明中，凝睛看天色」，有云：「野水連天天竟白」，有云：「東風兩岸綠楊搖，馬頭西接著長安道。正是黃河津要，用寸金竹索，纜著浮橋」。前人比王實甫為詞曲中思王、太白，實甫何可當。當用以擬董解元。李空同云：「董子崔張劇，當直繼《離騷》。」

校注

【詞旨載西廂警策】此文見於《董解元西廂引》。《董解元西廂引》上有「王元美《曲藻》、梅禹金」八字，稿本上有「梅禹金」三字。

【警策不下百十條】《董解元西廂引》下有「中」字。

【竹索纜浮橋】此句見於《西廂記》第一本第一折（油葫蘆）。

【檀口搵香腮】此句見於《西廂記》第四本第一折（勝葫蘆·么篇）。

【不知皆撰自董解元西廂】《董解元西廂引》無「西廂」二字。

【竹索上有寸金二字】按：《西廂記諸宮調》卷一（尾）：「要用寸金竹索，纜著浮橋。」

【檀口微微】此文見於《西廂記諸宮調》卷五（點絳脣纏令）。

【笑吐丁香舌】《西廂記諸宮調》下有「噴龍麝」三字。

【卻更增人劣】《西廂記諸宮調》「增」作「噴」。

【長亭送別】即《西廂記》第四本第三折。

【莫道男兒心如鐵】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（尾）。

【曉來誰染霜林醉】此文見於《西廂記》第四本第三折（端正好）。

【且休上馬】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（上平西纏令）。

【閨淚汪汪不敢垂】此文見於《西廂記》第四本第三折（小梁州）。

【馬兒登程】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（尾）。

【車兒投東】此文見於《西廂記》第四本第三折（四邊靜）。

【我郎休怪強牽衣】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（錯煞）。

【到京師服水土】此文見於《西廂記》第四本第三折（五煞）。

【驢鞭半裊】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（尾）。

【四圍山色中】此文見於《西廂記》第四本第三折（收尾）。

【人間煩惱填胸臆】《西廂記》「人」上有「遍」字。

【量這大小車兒如何載得起】《西廂記》「這」下有「些」字。

【帝里酒釀花濃】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（鬥鶯鶯），

「濃」作「穠」。

【你休憂文齊福不齊】此文見於《西廂記》第四本第三折（二煞）。

【我只怕停妻再娶妻】《西廂記》「只」作「則」，「怕」下有「你」字。

【一春魚雁無消息】《西廂記》上有「休要」二字。

【我這裏青鸞有信頻宜寄】《西廂記》「宜」作「須」。

【你切莫金榜無名誓不歸】《西廂記》「切莫」作「卻休」。

【君須記】《西廂記》上有「此一節」三字。

【若見異鄉花艸】《西廂記》「見」下有「了那」二字。

【一個止不定長吁】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（戀香衾）。

【一個頓不開眉黛】《西廂記諸宮調》下有「君瑞道閨房裏保重，

鶯鶯道路途上寧耐」十六字。

【他在那壁】此文見於《西廂記》第四本第三折（快活三），「他在那一作「一個這」。

【我在这壁】《西廂記》「我在这」作「一個那」。

【聽塞鴻】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（瑞蓮兒）。

【回首孤城】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（點絳脣纏令）。

【柳堤兒上把瘦馬兒連忙解】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（尾）。

【一徑入天涯】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（賞花時）。

【馳腰的柳樹上有漁樵】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（尾）。

【浙零零地雨打芭蕉葉】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（山麻皆）。

【燈兒一點】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（尾）。

【披衣獨步在月明中】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（應天長）。

【凝睛看天色】《西廂記諸宮調》「睛」作「精」。

【野水連天天竟白】此文見於《西廂記諸宮調》卷六（應天長）。

【東風兩岸綠楊搖】此文見於《西廂記諸宮調》卷一（尾）。

【正是黃河津要】《中國古典戲曲論著集成》本「津」下斷句，今

據《西廂記諸宮調》改。

【前人比王實甫為詞曲中思王太白】按：明胡應麟《莊嶽委談》卷下：「今王實甫《西廂記》為傳奇冠，北人以並司馬子長，

固可笑，不妨作詞曲中思王、太白也。」

【李空同云】此文見引明徐渭《曲序》。收於《徐文長三集》卷

十九。

人名注

【董解元】參見卷一 028 條。

【漢卿】即元關漢卿。參見卷一 041 條「關漢卿」注。

【黃嘉惠】明安徽休寧人。字長吉。崇禎間書肆。刊刻《蘇黃風流小品》、《西廂記諸宮調》等。

【王實甫】參見卷一 034 條。

【思王】即魏曹植。字子建。魏武帝曹操之子。封陳王。頗有文才，與曹操、曹丕並稱三曹。著有《曹子建集》。《三國志·魏書》卷十九有傳。

【太白】即唐李白。參見卷四 150 條「李」注。

【李空同】即明李夢陽。參見卷三 124 條。

【董子】即金董解元。參見卷一 028 條。

【崔】即崔鶯鶯。參見卷二 068 條。

【張】即張生。參見卷二 082 條。

書名·作品名注

【詞旨】參見卷首引用書目。

【西廂】即《西廂記》。參見卷一 051 條。

【董解元西廂】即《西廂記諸宮調》。參見卷一 028 條「西廂」注、卷一 051 條「西廂搗彈詞」注。

【董解元西廂記序】即明黃嘉惠《董解元西廂引》。收於《董解元西廂記》明崇禎間海陽黃嘉惠刻本。

【董子崔張劇】即《西廂記諸宮調》。

【離騷】戰國楚屈原撰。為《楚辭》之一篇。

『詞旨』は『西廂記』の名言を数多く載せているが、
「竹索^{たけづな}で浮き橋をもやう」、「紫檀のように紅い唇を、芳し
き頬にそっと押しあてる」などの言葉は、董解元の『西廂
記諸宮調』に基づいて書かれていることが分かっていない。
〔西廂記諸宮調〕では「竹索」という語の上に「寸金^{くさきり}」の二
字があり、「紅い唇」の句の方は「紫檀のように紅い唇が
かすかに開き、笑みつつ香しい舌を出すと、あの方に軽く
囁まれたので、さらにも増して悪い人だと言ってみる」と
なっており、関漢卿（の『西廂記』）に比べその美しさ、す
ばらしさは十倍する。

以上は黄嘉惠「董解元『西廂』引」に見える。考えるに、王実甫の（『西廂記』第四本第三折である）「長亭送別」の折は、傑作だとされている。董解元はいう。「男の心は鋼のようだと言わないでおくれ、君には見えないか、川面を埋める紅葉は、ことごとく別れゆく人のまなこより溢れた血。」王実甫はといえば、「朝になり、誰が霜の林を（紅く）酔いに染めたのか。すべては別れ行く人の涙。」という。「涙」や「霜の林」などは、血という字で（前の句がすべて）貫かれるのには及ばない。また董解元はいう。「ひとまず馬にお乗りにならないでください。もしもあなたのために涙を流さなければ、どうしてこの気持ちがあなただけに解るでしょう。」王実甫はいう。「溢れる涙をこらえて垂らすまいとするのは、人に知られたくないから。」董解元はいう。「（あの人に乗った）馬が旅路についたので、車に乗って宿に帰る。馬は西に行き、車は東に引かれて行く。二人が一歩行けば、また一歩と遠ざかる。」王

実甫はいう。「車は東へ、馬は西へ、二つの場所を彷徨い、日が落ちる山なみは緑の影を横たえている。」董解元はいう。「愛しいあなた、無理にお引き留めするのをお許し下さい。西の方への旅行きお帰りになるのは何時でしょうか。道中は用心し、なにとぞお気をつけを。遅寝や早起きはお止めになり、冷めたお茶や食事は口にせず、ご保重下さい。私はひたすら門にもたれ、ひたすらあなたの帰りをお待ちいたします。」王実甫はいう。「みやこに着いたらその土地に馴染み、道中ではお食事は控えめに。時宜に応じてお体を大切になさって下さい。寒村で雨露に遭ったら早くに眠り、安宿で風霜に遭ったら出立を遅らせて下さい。木枯らしの中、馬の旅は体を壊しがち、どうかご留意下さいませ。」董解元はいう。「驢馬の鞭をそっとあて、詩を吟ぜんと両肩をそびやかす別れの愁いの重さを問うことなかれ、いかに馬でも担いきれぬ。」王実甫はいう。「山の景色に囲まれて、夕陽の中で馬に鞭を一つくれる。浮き世の悩みが胸に満ち、（鶯鶯の乗る）あれほどの大きな車にどうして載せきれよう。」董解元はいう。「都は酒が美味くて花が多く、さまざまな景は大変艶やか。軽々しく他の人と夫婦の契りを結んではなりません。酒も遊びもお控え下さい。私の言葉をしかと覚えれば、必ず上位で合格できるでしょう。私はあなたのいない寝屋を守り、堅く扉を閉ざして、楽器を奏せず、身を装うことも止めましょう。どうかことごとにお便りを下さいませ。」王実甫はいう。「運悪く合格できないなどと心配なさいますな。気がかりなのは、私を捨てて別の女を娶ること。あなたが便りをくれなくても、私はことごとく人づてに手紙をお送りします。合格するまで帰らないなどと思わないで下さい。お忘れなきよう、

訳注

もしよその土地で奇麗な方を見ても、ここでしたように流連してはいけません。」董解元はいう。「一人は嘆息しきり、一人はずつと眉を寄せたまま。どちらの思いも、同じく愁う。」王実甫はいう「かれはあちら、わたしはこちら。代わる代わるに長いため息。」

両者を見比べると、王実甫は董解元に劣ること甚だしい。(さらに)董解元の風景描写となると、「辺塞から飛び来たる雁がねが、重なる夕暮れの雲をガアガアと飛び過ぎてゆくのを聞く」、「ぼつんとした街を振り返って望めば、青々とした山に抱かれているのがほのかに見える」、「柳の堤で、急いで痩せ馬の綱を解く」、「一筋の道は天の果てへと消え入り、荒涼たる古き川岸には、枯れ草は霜をいただいてつややかに輝く」、「腰の曲がった柳に漁師の粗末な舟が繋がれ、一振りの酒旗が茅ぶきの軒にかかり、淡い霧がさびしげに横たわって、二・三の家を閉ざしている」、「ポツポツと雨が芭蕉の葉を打ち、セカセカとした蟋蟀の音が次から次へ」と言ったり、「灯火ひとつ、やつとのもので吹き消せば、雨はやみ、躍り出たほのぐらい月が窓にかかる」、「服をはおって独り月明かりの中を歩き、瞳を凝らして空を見る」、「野の川は天に連なり、天はやはり白い」、「東風に両岸の緑の柳が揺れ、船着場は西のかた長安への道に通ず。まさしくここは黄河の重要な渡し、寸金と竹索で浮橋をもやう」などがある。先人は王実甫を評して戯曲における曹植や李白であるとしたが、王実甫がどうしてそんな評価に耐えるだろうか。董解元の模倣者およびのが相応しい。李夢陽はいう。「董解元の『西廂記諸宮調』は、『離騷』を継ぐものとすべきである。」

【関漢卿の『西廂記』に比べ：】

明の卓人月は「『新西廂』序」で、『西廂記』は王実甫の原作を、関漢卿が補ったものであるとし、明清代、その説が広く流布した。卷二 070 條参照。

(山下)

208

《曲藻》二云：「偶見歌《伯喈》者云：『浪暖桃香欲化魚，期逼春闈，詔赴春闈。郡中空有辟賢書，心戀親闈，難捨親闈。』頗疑兩下句意各重。後得一善本，乃『浪暖桃香欲化魚，期逼春闈，難捨親闈。郡中空有辟賢書，心戀親闈，難赴春闈』。意既不重，益見作者之工。」《談輅》云：「嘗見《琵琶記》草本，『醉扶歸』『綵筆本潤』二句，改作『詞源倒流』二句，今刻本已從之矣。又見一本，『三不從做成災禍一似天來大』，改云『三不從把好事翻成禍』，惜未有從之者。改筆皆草書旁注，意必東嘉手筆。」《秦淮劇品》云：「曲引之有呼韻，自趙五娘之呼『蔡伯喈』始也。而無雙之呼『王家哥哥』，西施之呼『范大夫』，皆有悽然之韻。」

校注

【曲藻】此文見於第三十三頁。

【浪暖桃香】此文見於《琵琶記》陸貽典鈔本第四齣（蔡公逼伯喈赴試）（一翦梅）。按：陸貽典鈔本作「詔赴春闈」、「難捨親

闌」，陳眉公批評本作「難捨親闌」、「難赴春闌」。

【談輅】即明張鳳翼《譚輅》。此文見於第三十六葉。

【醉扶歸】此牌見於《琵琶記》陸貽典鈔本第三十五齣〈五娘書館題詩〉（醉扶歸）。按：陸貽典鈔本作「彩筆墨潤鸞封重，只為五簫聲斷鳳樓空」，《六十種曲》本第三十六齣〈孝婦題眞〉作「縱使我詞源倒流三峽水，丈夫，只怕你胸中別是一帆風」。

【三不從做成災禍一似天來大】此句見於《琵琶記》陸貽典鈔本第三十四齣〈五娘牛小姐見面〉（金衣公子）。按：《琵琶記》陸貽典鈔本作「三不從做成災禍天來大」。

【三不從把好事翻成禍】按：《琵琶記》諸本中，未見作「把好事翻成禍」者，待考。

【秦淮劇品】此文見於明潘之恆《鸞嘯小品》卷二〈與楊超超評劇五則〉。

【蔡伯喈】按：《琵琶記》陸貽典鈔本第十九齣〈蔡婆埋冤五娘〉（鑼鼓令）：「教人只恨蔡伯喈」。

【王家哥哥】按：《明珠記》傳奇汲古閣原刊本、《六十種曲》本中，未見劉無雙稱王仙客為「王家哥哥」之處。待考。

【范大夫】按：《浣紗記》傳奇世界書局《崑曲大全》石印本第九齣〈思蠱〉（綿搭絮）：「范大夫吓爲你香消玉減，蹙損雙蛾。范大夫吓難道你賣俏行姦，認我做桃花牆外柯」，而不見於怡雲閣本、《六十種曲》本、中華書局《浣紗記校注》等，待考。

人名注

【伯喈】即漢蔡邕。參見卷一007條。

【東嘉】即元高明。參見卷一033條。

【趙五娘】元高明《琵琶記》中人物。蔡邕之妻。

【無雙】即劉無雙。唐薛調《無雙傳》中人物。尚書劉震之女。按：明陸采《明珠記》傳奇亦演此事。

【王家哥哥】即唐王仙客。唐薛調《無雙傳》中人物。尚書劉震之外甥，與劉無雙許婚。

【西施】戰國越國人。越王勾踐獻之而迷惑吳王夫差。見《吳越春秋》卷九〈勾踐陰謀外傳〉。

【范大夫】即戰國楚蠱。佐越王勾踐滅吳，功成，浮海而去。見於《史記》卷四十一〈越王勾踐世家〉。

書名・作品名注

【曲藻】參見卷首引用書目。

【歌伯喈者】《伯喈》，即元高明《琵琶記》傳奇。參見卷一052條。

【談輅】即明張鳳翼《譚輅》。參見卷首引用書目。

【琵琶記】參見卷一052條。

【秦淮劇品】參見卷首引用書目。

戲曲用語注

【醉扶歸】南仙呂過曲。

通釈

『曲藻』にいう。

たまたま『琵琶記』を演ずるのを見たが、「浪がぬるみ桃花の香りただよえば、いつそわが身が魚と化せばと思うほど、ときまさに春の科挙がせまる、みことのりに応じて科挙に向かう。我が町に賢士を招くしらせむなしくとどくも、二親の身が気にかかり、二親のことはおき捨てがた

訳注

【三不従】『琵琶記』作中において蔡邕が強いられる、自らの思いに反する三つのこと。蔡邕は父の命で科挙を受け、皇帝の命で議郎となり、丞相の命で丞相の娘と結婚する。

(川)

い」と歌っていた。それぞれの下の二句の意味が重なっているのがいぶかしく思えてならなかった。その後ある良い版本を手に入れたところ、なんとこうあった。「浪がぬるみ桃花の香りただよえば、いつそわが身が魚と化せばと思うほど。ときまさに春の科挙がせまるも、二親のことはおき捨てがたい。我が町に賢士を招くしらせむなしくとどくも、二親の身が気にかかり、科挙には赴きがたい。」これなら意味が重ならず、作者の巧みさがより現れる。

『譚輅』にいう。

以前、『琵琶記』の草稿を見たところ、(第三十五齣の)「醉扶歸」の「あやなす筆はうるおい」の二句が、「滔々たる言葉はさかしまに流れ」の二句に改められていた。今の版本もすでにこれに従っている。またある版本では、(第三十四齣の)「金衣公子」の「三不従」が天ほどに大きな災いとなる」の句が、「三不従」により、良き事転じて災いとなる」と改められていたが、惜しいことに、これに従う版本はまだない。本文の書き換えはみな草書で脇に注されているが、きつと高明自身の書きこみだろう。

『秦淮劇品』にいう。

楽曲の中で呼びかけの言葉に余韻を持たせるのは、『琵琶記』伝奇で趙五娘が「蔡伯喈」と呼びかけるのが始まりである。(『明珠記』伝奇の)劉無双の「王のお兄さま」という呼びかけや、(『浣紗記』伝奇の)西施の「范大夫さま」という呼びかけは、みな哀切な余韻を持っている。

訳注

【三不従】『琵琶記』作中において蔡邕が強いられる、自らの思いに反する三つのこと。蔡邕は父の命で科挙を受け、皇帝の命で議郎となり、丞相の命で丞相の娘と結婚する。

(川)

209

相傳臨川作《還魂記》，運思獨苦。一日，家人求之不可得。遍索，乃臥庭中薪上，掩袂痛哭。驚問之，曰：「填詞至『賞春香還是舊羅裙』句也。」

校注

【賞春香還是舊羅裙】此句見於明湯顯祖《牡丹亭》第二十五齣〈憶女〉(「香羅帶」)。「牡丹亭」是「你」字。

人名注

【臨川】即明湯顯祖。參見卷二070條「湯若士」注。

【春香】明湯顯祖《牡丹亭》傳奇中人物。杜麗娘侍女。

書名・作品名注

【還魂記】即明湯顯祖《牡丹亭》傳奇。參見卷二085條。

通釈

伝え聞くところでは、湯顯祖は『牡丹亭』伝奇を作ったとき、ひたすら考えをめぐらし苦心して(作詞して)いた。ある日、召使が湯顯祖を探したが見つからなかった。屋敷をくまなく探すと、なんと中庭におかれた薪の上に倒れ伏して、たもとで顔をおおい、声をあげて泣いていた。驚いてわけをたずねると、湯顯祖は「こ

の春香に賜りしは、かつてお召しのうすぎぬのもすぞ』という句まで作ったのだ」と言った。

(川)

210

填詞高手如陳大聲、沈青門之屬，俱南北散套，不作傳奇。惟周憲王所作雜劇，名《誠齋樂府》，往往調入弦索，有金、元風範。南曲如《四節》、《連環》、《繡襦》之屬，出於成、弘間，稍為當時所稱。嘉靖間，陸天池名采者，所撰有《王仙客明珠記》、《韓壽偷香記》、《陳同甫椒觴記》、《程德遠分鞋記》，惟《明珠記》行於世。鄭若庸《玉玦記》遊西湖一套，當時膾炙人口。見《蝸亭雜訂》。

校注

【填詞高手】按：此條見於明沈德符《萬曆野獲編》卷二十五（填詞名手）。此所引乃節略，一一不舉其異同。

【遊西湖】即《玉玦記》第十二齣〈賞花〉。

【蝸亭雜訂】參見卷首引用書目。

人名注

【陳大聲】參見卷一 034 條。

【沈青門】即明沈仕。參見卷一 034 條。

【周憲王】即明朱有燬。周王朱橚之子，世襲王位。諡憲，世稱周憲王。工音律。著有《誠齋錄》、散曲集《誠齋樂府》，以及《慶朔堂》、《桃源景》、《繼母大賢》、《團圓夢》、《香囊怨》、

《復落娼》、《仙官慶會》、《得驕虞》等三十餘種雜劇。

【陸天池名采】參見卷二 070 條「陸」注。

【鄭若庸】參見卷二 084 條。

書名・作品名注

【誠齋樂府】明朱有燬所撰雜劇三十餘種之總稱。按：此稱始於明沈德符《萬曆野獲編》。朱有燬散曲集亦稱《誠齋樂府》。

【四節】即《四節記》。明沈仕撰。南戲傳奇。以四種單齣傳奇合為一劇，各齣以四名人配四季節。春季為《杜子美曲江記》，夏季為《謝安石東山記》，秋季為《蘇子瞻赤壁記》，冬季為《陶秀實郵亭記》。有《風月錦囊》所收本。

【連環】即明王濟《連環記》。見卷二 065 條。

【繡襦】即明徐霖《繡襦記》。見卷二 095 條。

【王仙客明珠記】即明陸采《明珠記》。見卷二 094 條。

【韓壽偷香記】即《懷香記》。明陸采撰。南戲傳奇。四十齣。有明汲古閣原刊本。演晉書生韓壽為司空賈充之掾，與賈充女賈午私許，為賈充所知，被貶為征東軍卒，反而立功，招贅為賈充婿事。

【陳同甫椒觴記】即《椒觴記》。明陸采撰。南戲傳奇。《群音類選》卷十五收〈西湖遊園〉、〈旅館椒觴〉、〈羅織怨招〉、〈獄中兄弟〉、〈戰捷勝遊〉、〈師生宴雪〉等六齣，《月露音》卷四收〈宴雪〉齣。

【程德遠分鞋記】即《分鞋記》。明陸采撰。南戲傳奇。《今樂考證》著錄。佚。

【玉玦記】參見卷二 084 條。

【蝸亭雜訂】參見卷首引用書目。

戯曲用語注

【散套】 参見卷一 030 條。

【弦索】 参見卷一 014 條。

通釈

（明前期の）作詞の名手であった陳大声・沈采といった人々は、みな南曲・北曲の散曲・套数のみを作り、戯曲は作らなかった。ただ朱有燉の手になる雜劇だけは『誠齋樂府』として残っている。その調べは北曲（の曲律）にかなっており、金・元の氣風がある。南曲の『四節記』・『連環記』・『繡襦記』の類は、明（中期）の成化・弘治年間に現れ、その当時にはある程度評価を得た。嘉靖年間には陸采が出て、作品には『明珠記』・『懷香記』・『椒觴記』・『分鞋記』があったが、その中で『明珠記』伝奇のみが世に行われている。鄭若庸の『玉玦記』伝奇（第十二齣）の西湖に遊ぶ場面の套曲は、当時人口に膾炙した。（『蝸亭雜訂』に見える。）

（川）

* 本稿は、日本學術振興會科学研究費「中国古典戯曲総合データベースの応用的研究」（平成二十三年度、基盤研究(B)、課題番号：23320077、研究代表者：千田大介）による成果の一部である。